

竹駒神社境内遺跡

—向唐門解体修復工事に伴う発掘調査報告書—

2009年3月

岩沼市教育委員会

竹駒神社境内遺跡

—発掘調査報告書—

例　　言

1. 本書は宮城県岩沼市稻荷町 1 番 1 号に所在する「竹駒神社境内遺跡」発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、市指定文化財である向唐門解体修復及び耐震補強工事に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 調査に際しては、竹駒神社に御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。
4. 発掘調査は 2007 (平成 19) 年 11 月 4 日から 12 月 12 日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は 169 m²である。
5. 出土品整理及び報告書作成については、2008 年 6 月 1 日から 2008 年 12 月 26 日まで、岩沼市文化財展示室にて行なった。
6. 本書の第 2 図は岩沼市発行の 1/10,000 の地形図を複製して使用した。
7. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

S K ; 土坑　　S D ; 溝跡　　S X ; 通路状遺構及び性格不明遺構
8. 本書の執筆・編集は、生涯学習課内の協議の上、川又隆央が担当した。
9. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物とも川又が撮影した。
10. 本書に関わる出土品および記録図面等は岩沼市教育委員会生涯学習課にて保管してある。
11. 発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）

池谷初枝　押木弘己　日下和寿　熊谷満　斎木秀雄　田中則和　本田泰貴　吉井宏
渡辺清子　渡部紀
宮城県教育庁文化財保護課
12. 本報告書作成に係わる資料整理は川又の指示を受けて伊藤和雄が行なった。
13. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
 - (2) 縮尺は図に示すとおりである。なお、古錢と石鏡は 1/1 で掲載している。
 - (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原: 1973) に拠った。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観	
1. 位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査経過と方法	7
3. 基本土層	9
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	
1. 向唐門建築期（I層上）	10
a. 向唐門礎石列	10
b. 遺構外出土遺物	17
2. 向唐門建築以前の整地面（II層上）	17
a. 挖立柱跡物跡	17
b. 柱跡	20
c. 通路状遺構	22
d. 土坑	23
e. 性格不明遺構	23
f. ピット	25
g. 遺構外出土遺物	27
3. II層以下の遺構群（III層上）	29
a. 土坑	29
b. 溝跡	36
c. ピット	37
第Ⅳ章 考察	
1. 遺物について	38
2. 出土遺物から見る特色	39
3. 遺構について	39
4. 各層位の年代観について	42
第Ⅴ章 まとめ	43

挿 図 目 次

第1図 岩沼市の位置と地形分類	1
第2図 岩沼市内遺跡分布図	3
第3図 竹鶴神社周囲図	8
第4図 グリッド配置図	8
第5図 基本土層模式図	9
第6図 I層上面遺構図	11
第7図 向唐門礎石掘え方出土遺物1	12
第8図 向唐門礎石掘え方出土遺物2	13
第9図 向唐門礎石掘え方出土遺物3	14
第10図 向唐門礎石掘え方出土遺物4	15
第11図 I層構築土出土遺物	16
第12図 II層上面遺構図	18
第13図 SB01 建物跡	19
第14図 SB01 建物跡柱穴断面図	19
第15図 SB02 建物跡	19
第16図 SB02 建物跡柱穴断面図	19
第17図 SB03 建物跡・SA03 柱列	19
第18図 SB03 建物跡柱穴断面図	19
第19図 SA03 柱列跡柱穴断面図	19
第20図 SA01 柱跡	21
第21図 SA01 柱跡柱穴断面図	21
第22図 SA02 柱跡	21
第23図 SA02 柱跡柱穴断面図	21
第24図 II層上面掘立柱建物跡・柱跡出土遺物	22

第25図 II層上面土坑・ビット	24
第26図 SX03不明遺構アワビ出土状況	25
第27図 II層上面遺構出土遺物	26
第28図 II層上面遺構外出土遺物	28
第29図 II層構築土出土遺物	28
第30図 III層上面遺構図	30
第31図 SX02参道跡断面図	30
第32図 III層上面土坑1	32
第33図 III層上面土坑2・ビット・溝跡	33
第34図 III層上面遺構出土遺物1	35
第35図 III層上面遺構出土遺物2	36
第36図 II層上面の硬化範囲	41
第36図 III層上面のL字状溝跡	41

表 目 次

第1表 遺跡地名表	4
第2表 II層上面ビット属性表	25
第3表 III層上面ビット属性表	37
第4表 遺物觀察表	46

写 真 図 版 目 次

写真図版1	51
1. I層上面遺構全景（西から）	51
2. P-1断面（北から）	51
3. P-5断面（南から）	51
4. P-6断面（南から）	51
5. P-2遺物出土状況（北から）	51
写真図版2	52
1. II層上面遺構全景（西から）	52
2. II層上面遺構全景（東から）	52
写真図版3	53
1. SX03不明遺構アワビ出土状況（南から）	53
2. SK08土坑遺物出土状況（南から）	53
3. SB03掘立柱跡物跡遺物出土状況（南から）	53
4. II層上面遺物出土状況（東から）	53
写真図版4	54
1. II層上面遺構北部完掘状況（西から）	55
2. II層上面遺構南部完掘状況（西から）	55
3. SX01不明遺構検出状況（東から）	55
写真図版5	55
1. III層上面遺構全景（西から）	56
2. III層上面遺構全景（南から）	56
写真図版6	56
瓦	56
写真図版7	57
磁器・陶器	57
写真図版8	58
陶器・土器	58
写真図版9	59
瓦質土器・石製品・金属製品ほか	59

調 査 要 項

遺跡名	竹駒神社境内遺跡（宮城県遺跡登録番号：15056）
遺跡記号	TJK
所在地	岩沼市稻荷町
調査主体	岩沼市教育委員会
調査協力	宮城県教育庁文化財保護課 竹駒神社
調査面積	169 m ²
調査期間	平成19年11月4日～12月12日

【調査体制】

平成 19 年度 教育長 影山 一郎
生涯学習課 課長 平井 淳一郎 主幹兼係長 木野 潤一
主査 高橋 学 技術主査 川又 隆央

平成 20 年度 教育長 影山 一郎
生涯学習課 課長 木皿 光夫 課長補佐 木野 潤一
主査 高橋 学 技術主査 川又 隆央
主事 猪野 高広

【発掘作業員】

安住 新吉、伊藤 和雄、今野 優、佐藤 富夫、菅原 孝子

【室内整理作業員】

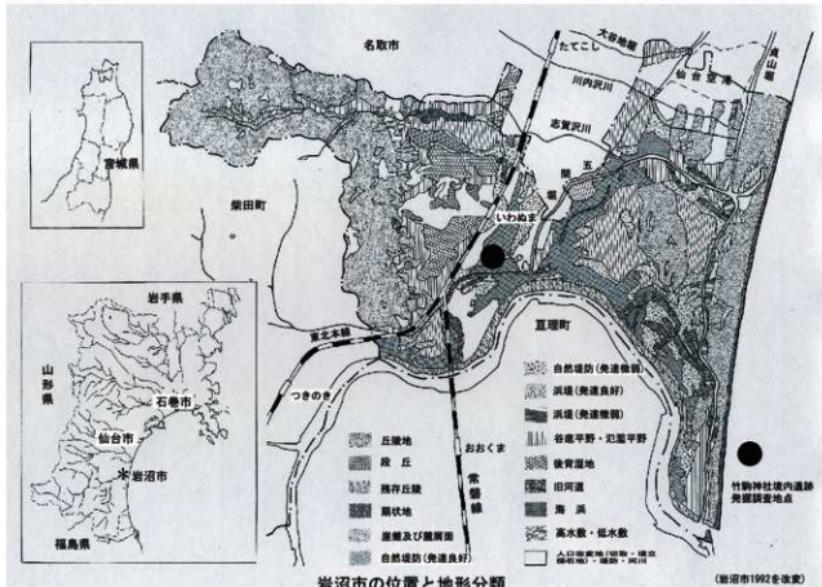
伊藤 和雄、菅原 孝子

第Ⅰ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境（第1図）

岩沼市は宮城県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町と、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5400 km²を測る。当市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また、当市は古来より浜街道と、東街道が合する地点であるが、現在でも国道4号線と同6号線、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる高館丘陵（標高200～300m）・岩沼丘陵（標高10～100m）と、これから東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵の東縁から太平洋までの間に7～8kmの幅をもって発達する。この名取平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が頗著に発達している。本遺跡地は、名取平野内に南北方向に存在する独立低位丘陵の南東麓部に占地している。現地表面の海拔は4.0m前後を測る。



2. 周辺の遺跡と歴史的環境（第2図）

本地点周辺では、縄文時代から近世にかけて種々の遺跡が形成されている。以下にこれまで発掘調査によって得られた知見について、時代順にその概略を記す。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡としては 25 の鶴ヶ崎城跡がある。ここでは平成 16 年に調査を行なった第 4 地点で、土里下より発見された埋没小支谷で形成された遺物包含層が発見された。この遺物包含層より出土した土器は、無文で織維混入が顕著に認められない櫛木貝塚下層出土資料に類するものから、織維混入が顕著で三角文の結節点に円形刺突文を配し内面に条痕文を有する鶴ヶ島台式、そして同様に織維混入が顕著で外面に縄文、内面に条痕文を有する梨木畠式に比定される土器群であり、総じて縄文時代早期後葉に位置付けられている。出土した土器の器種は、全容が判明する資料は少ないながらも深鉢と鉢で占められている(川又隆央 2005b)。また 2 の北原遺跡では、平成 4 年に行なわれた調査の際に、断面形状がフラスコ状を呈する特異な土坑が多数確認されたほか、遺構には伴わないものの縄文時代前期及び後期に比定される土器が出土しており(小村田達也他 1993)、付近に該期の集落跡の存在を予見させる。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡も、平成 16 年に調査を行なった 25 の鶴ヶ崎城跡第 4 地点で、土里下より発見されている。ここでは土里下に遺存していた旧表土中より弥生時代中期後葉の十三塚式期に比定される土器及び石包丁が出土したが、このほか地床炉を有する堅穴住居跡が 1 軒検出されている。この堅穴住居跡からは石鎌のみの出土であったが、遺構覆土は弥生時代の遺物を含むする旧表土と極めて近似した黒褐色土と判断できたことから、弥生時代中期後葉の所産であると考えている(川又隆央 2005b)。14 の朝日古墳群においても昭和 55 年時の墳丘調査の際に多量の弥生時代中期後葉の時期を中心とした遺物が出土している(川又隆央 2007)。このほか宮城県教育委員会によって調査が実施された 2 の北原遺跡でも、遺構には伴わないものの弥生土器片が出土している(小村田達也他 1993)。

【古墳時代】

集落遺跡は前期遺跡の北原遺跡のほか、下野郷地区に所在する孫兵衛谷地遺跡が当市で確認されている。2 の北原遺跡では 1992 年に県道仙台・岩沼線の改良工事に伴い発掘調査が実施されており、塩釜式期に比定される堅穴住居跡が 36 軒確認されている。このうち、10 号住居跡からは 39 個の土玉が出土し、生業として前代から続く稻作のほかに魚撈も行なっていたことが判明している(小村田達也他 1993)。

高塚古墳としては 6 の新明塚古墳、5 の長塚古墳が、横穴墓としては 27 の二木横穴墓群、28 の丸山横穴墓群、24 の土ヶ崎横穴墓群、22 の引込横穴墓群、17 の長谷寺横穴墓群で発掘調査が実施されている。

新明塚古墳・長塚古墳は、長岡字塚越の丘陵上に位置する古墳である。新明塚古墳では昭和 25 年に國學院大學によって調査が実施され、元来は円墳であると考えられていたが、調査の結果では前方後円墳であった可能性が高いことが指摘されている。古墳の長軸は 16m、後円部径



第2図 岩沼市内遺跡分布図

第1表 遺跡地名表

No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	竹駒神社境内遺跡	自然堤防	古墳後、中世・近世	20	白山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
2	北原遺跡	丘陵	註石器、繩文早～後、弥生、古墳前	21	白山古墳	丘陵	古墳
3	杉の内遺跡	丘陵斜面	繩文早・前、弥生、古墳中	22	引込横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
4	長塚北遺跡	丘陵斜面	繩文、古代	23	石垣山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
5	長塚古墳	丘陵斜面	古墳中	24	土ヶ崎横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
6	新明塚古墳	丘陵斜面	古墳中	25	鶴ヶ崎城跡	丘陵	繩文早、弥生、中世・近世
7	上根崎遺跡	丘陵麓	繩文、古墳中	26	丸山横穴墓群	自然堤防	古墳後
8	長徳寺前遺跡	丘陵麓	近世	27	二木横穴墓群	自然堤防	古墳後
9	中ノ原遺跡	谷底平野	中世	28	丸山遺跡	自然堤防	中世・近世
10	熊野遺跡	丘陵麓	古代	29	古岡山遺跡	丘陵斜面	弥生、奈良
11	かめ塚古墳	砂堆	古墳中	30	新館跡	丘陵	中世
12	かめ塚西遺跡	砂堆	弥生、古墳	31	新館前遺跡	丘陵斜面	繩文～平安
13	鷺崎横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	32	烟堤上貝塚	丘陵斜面	繩文早・前、古代
14	朝日古墳群	丘陵	弥生、古墳、中世	33	烟堤上横穴墓群	丘陵斜面	古墳後
15	朝日遺跡	丘陵	古墳、古代	34	根方泉遺跡	丘陵麓	弥生
16	竹倉部遺跡	丘陵麓	古墳～古代	35	長谷古館跡	丘陵	室町
17	長谷寺横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	36	東平王塚古墳	丘陵麓	古墳
18	平等山横穴墓群	丘陵斜面	古墳後	37	原遺跡	自然堤防	古代
19	新田遺跡	丘陵斜面	繩文、古墳、古代	38	南玉崎遺跡	自然堤防	古代

は9m、前方部の幅は5mであり、墳丘の高さは後円部が3m、前方部が1mを計測する。長塚古墳も昭和26年に國學院大學によって発掘調査が行われ、墳丘全体に黄褐色粘土を用いて構築されていることが確認されている。形状は有段円墳であり、古墳の規模は直径37m、高さは4.2mを計測する。しかしながら両者からは埴輪などの遺物が出土していないため、作られた年代は不明である。

一方、横穴墓群は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の泥岩層露頭面で多く造営されている。市内に点在する横穴墓群は現在までのところ9箇所で確認されている(消滅した鷺崎、石垣山横穴墓群を含む)。これらの横穴墓は、構造上では平面形が方形乃至不整形、断面はドーム型であり、玄室内に棺座を有することが大きな共通項として挙げられる。出土遺物も土師器よりも須恵器の出土量が、圧倒的に凌駕するという特色を持ち、中でも湖西地域を中心とした東海諸窯、または猿投窯と推測されるフラスコ形瓶など製品が、県内の横穴墓群出土資料と比べた場合、比較的多く存在する。さらに遺存状態は劣悪なもの、これまでに多数の直刀などの金属製品も出土している。中でも二木横穴墓群では頭椎太刀の柄頭の一部が、引込横穴墓群(渡辺清子2000)では轡の一部が出土しており、前段階でも東北地方最大級の古墳が造営

された当地域は、『国造本紀』では未記載であるが、地方有力者が存在していた可能性が高い。

【古代】

古代の遺構・遺物に関しては、現時点で発掘調査によって得られた知見は少ない。しかしながら出土状況は不明ながらも二木横穴墓群、長谷寺横穴墓群の出土資料中には該期に属する遺物が認められる。

なお、『延喜式』に東海道の駅家として記載され、また多賀城跡より出土した過所木簡（東北歴史博物館 2005）でその名が知られる「玉前駅」は、本市の南部（現在の玉崎地区）にその存在が比定されるが、その東側に展開する 37 の原遺跡では平成 17・18 年に実施された下水道工事の際に古代の遺構・遺物が存在していることが明らかとなった。ここではこれまで堅穴住居跡のカマドと考えられる焼土遺構、溝跡、柱穴などの遺構と非ロクロ・ロクロ整形の土師器、須恵器などが出土している。出土した遺物は全て古代の範疇として捉えられ、前時代のものを含まないことから、ここで発見された遺構群は「玉前駅」の設置・機能時と密接に関連した集落である可能性が高い。

また北原遺跡では、これまでに 1 軒の堅穴住居跡が調査されている。この住居跡は両袖に川原石を用いて構築したカマドを有し、支脚には川原石の上に赤焼土器壺を逆位に被せて使用している。出土遺物はロクロ土師器と赤焼土器であり、形状から 9 世紀後半の時期と考えられる。なおこの地域は 10 世紀前半に編纂された『和妙類聚抄』で記載される「指賀郷」に含まれるが、古代東海道の推定ルートに近接することから、今後も集落遺跡が発見される可能性が高い。

【中世】

発掘調査で中世遺跡の存在が確認できたのは、25 の鶴ヶ崎城跡、14 の朝日古墳群、28 の丸山遺跡、9 の中ノ原遺跡、及び下野郷館跡である。鶴ヶ崎城跡では第 4 地点の調査で 15 世紀前半頃の年代観が与えられる青磁盤や常滑焼甕片などが出土し、さらに中世から近世の時期にかけて補・改修されたと推定される土壘が確認された。この土壘の最終形態は基底部 9.3m で、平場内よりの比高差は約 2 m を測る（川又隆央 2005b）。朝日古墳群では平成 17 年に調査が実施された地点の下位平場から北宋錢などを伴う土葬土壙墓群が確認されている。土葬土壙墓内は長方形と隅丸方形、不定形の形状があり、埋葬形態の異なる葬送が行われている。この墓域の機能時期は 13 世紀後半～15 世紀代と考えられている（川又隆央 2007）。丸山遺跡では平成 18 年度に実施された調査の際に遺構には帰属しないものの、白石古窯跡群の製品と推定される甕片が出土している。中ノ原遺跡では発掘調査は未実施ではあるが、平成 17 年度に実施した分布調査の折に移設された板碑の付近より中世瓷器系陶器甕片が採取されたが、この陶器片の内面には火葬骨片が付着しており、また地権者によって板碑下部から出土した火葬骨を充填する短頸壺が保管されていた。これら 2 種類の骨蔵器は、基壇状の高まりに立つ 2 基の板碑に伴って埋納されたものと推量している（川又隆央・熊谷萬 2009）。このほか市域東部に存在する下野郷館跡では平成 12～15 年度にかけて行なわれた調査の際に、13 世紀後半頃の年代観が与えられる白石古窯跡群産の甕片のほか、12 世紀後半の年代観を有する白磁碗片、及び 13 世紀代と考えられる青磁碗片が出土していることから、五間堀川の自然堤防上に中世遺跡が営まれてい

たことが明らかとなっている(川又隆央・小泉博明 2004)。また市域の北西部の山中に所在する岩藏寺薬師堂の背後にある平場には、塚状の集石を伴って凝灰岩製の板碑が立ち、周囲に散在する小型板碑を含め7基が境内域に存在する。板碑を造立している立地の特異性や、板碑分布のあり方等から中世における地域畫場として機能していた可能性も考慮されている(川又隆央 2005c)。

【近世】

近世の遺構・遺物は、25の鶴ヶ崎城跡、14の朝日古墳群、28の丸山遺跡、8の長徳寺前遺跡、及び下野郷館跡、西須賀原遺跡で確認されている。鶴ヶ崎城跡ではこれまで4地点で調査が行われているが、このうち第1地点では東北福祉大学によって平成20年まで8次に渡って調査が実施されている(東北福祉大学 2002~2009)。ここでは丘陵頂部の平場で南北に走方向を持つ石列とこれの西側ではほぼ併走しながら北側では東側に屈曲する溝跡が確認されている。また礎石建物跡、通路状遺構も確認されている。さらに第5次・第7次では小穴に大堀相馬焼碗を、第6次調査では同じく小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これにかわらけで蓋をするように被せた状態のものが検出された。この3例は現時点では地鎮関連の遺構として解釈されている(東北福祉大学 2006・2007・2008)。このほか第2地点では掘立柱建物跡、土坑、及び近代の大規模な地形改変の痕跡が確認され(川又隆央 2004a)、第3地点では掘立柱建物跡、魚骨を含む溝跡などが発見されている(川又隆央 2004b)。上記の3地点ではいずれも18世紀後葉～19世紀代の遺物を主体として出土している。

長岡字塚腰に所在する長徳寺前遺跡では、平成15年に曹洞宗龍谷山長徳寺(1657年開山)門前の現市道下より2基の礎石経塚が発見されている。経塚はいずれも墳丘を有しておらず、1号経塚が径1.4mほどの円形、2号経塚は1辺が1.0mほどの方形土坑の底面に厚さ40～60cmにわたって礎石経が埋置されていた。出土した礎石経の総点数は、1号経塚が14,897点、2号経塚は11,479点である。このうち文字判認可能なものは1号経塚で10,089点、2号経塚で6,329点であり、文字の遺存状態はかなり良好である。書写經典については、1号経塚では妙法蓮華經譬喻品第三、方便品第二、信解品第四を中心に書写したものと考えられ、2号経塚では仏説觀普賢菩薩行法經に関連する文字が多数あり、仏説觀普賢菩薩行法經を中心に、妙法蓮華經各品の代表的な部分を書写したと考えられる。2基の礎石経塚の築造年代は、それぞれ1号経塚が唐津産陶器の年代観から17世紀後半頃、2号経塚が「奉讀誦書寫大乘妙典一百部一字一石金剛塔」の年号(文政7年)から19世紀前半頃と考えられる(川又隆央 2005a)。

このほか下野郷館跡では、平成12～15年にかけて県道亘理・塩釜線の改良工事に伴って発掘調査が実施され、主に江戸時代の足軽屋敷にかかると考えられる掘立柱建物跡が61棟、井戸跡58基などを検出している。ここで確認された井戸跡は素掘りのものが大半を占めるが、支柱は木材で組み、その外側に竹を立てかけるものが2基確認されている。また溝跡は規模や方向から屋敷地や館跡全体を区画する施設の可能性があると考えられている(川又隆央・小泉博明 2004)。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至る経緯（第3図）

平成 16 年 9 月 2 日に岩沼市教育委員会（以下、市教委）に市指定有形文化財である竹駒神社向唐門の解体修復及び耐震補強工事計画が寄せられた。これは天保十三年(1842)に建築された向唐門が老朽化し、屋根の重量によるひずみが大きく生じてきたことに端を発する。竹駒神社では向唐門造営委員会を平成 19 年 6 月 21 日に設置し、工法、耐震補強工事について検討を行った。その結果、向唐門を一度解体したのち利用可能部材は再度使用すること、外観の改変は行わないことなどが確認された以外に、多数の参詣者が訪れるという建造物の性格を考慮し、新たに向唐門の両脇に鉄骨を配し冠木の両端を連結するという工法が採択された。さらに礎石の沈下防止や向唐門に付随する四半敷の整地も併せて実施することになった。ところがこれらの工事に際しては地下掘削を行うことになるため、古から当地に鎮座していた伝承の裏付けとなる遺構・遺物が遺存していた場合には大きく損なわれることが予想されたことにより、これまで周知の遺跡としての登録は為されていなかったが、工法決定以前に地下遺構の有無を確認するため試掘調査する必要性が生じた。

試掘調査は平成 19 年 8 月 8 日に実施した。この調査時にはまだ建物の解体工事が進行中であり、四半敷は除去されていないため $2 \times 1\text{ m}$ のトレンチを 2 箇所設定するという部分的な調査であった。しかしながら向唐門建造時に盛られた整地層下から柱痕を有する柱穴等が明瞭に確認されたことから、神社境内域を構成していた施設が遺存している可能性が極めて高まった。このため「竹駒神社境内遺跡」として同年 8 月 22 日に県遺跡台帳へ登録をし、同時にこの結果を受けて再度採用工法等について造営委員会において協議したが、計画の変更は困難となり、同年 11 月 2 日から 12 月 12 日にかけて本格調査を実施する運びとなった。

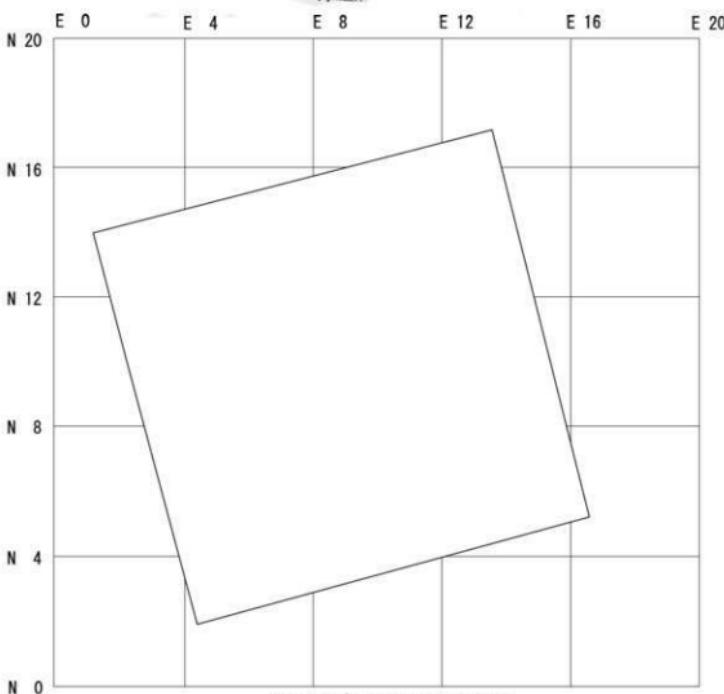
2. 調査経過と方法（第4図）

本格調査は平成 19 年(2007)11 月 2 日から実施した。設定した調査区の面積は約 169 m^2 である。調査開始以前に四半敷及び計 6 基の向唐門礎石の除去を行なった。その後、人力によって四半敷敷設に伴い用いられた白色砂の除去を行い、遺構面の検出に努めた。作業の経過は以下の通りである。

11/2	敷砂除去開始。機材搬入。
11/6	礎石掘え方掘削開始。
11/7	I 層全景撮影。
11/8	トラバース測量。I ~ II 層掘下げ開始。
11/15	II 層遺構精査。



第3図 竹駒神社境内図（『竹駒神社』に加筆）



第4図 グリッド配置図(1/150)

11/16	遺構確認時第1次全景撮影。遺構掘下げ開始。
11/29	S X 0 3 よりアワビ出土。
12/2	II層全景撮影。
12/3	II～III層掘下げ開始。III層での遺構確認。
12/4	北側調査区でのIII層遺構掘下げ。
12/5	土層断面、平面図作成。
12/6	南側調査区でのIII層遺構精査。旧参道跡（S X 0 2）トレンチ調査。北側調査区全景。
12/7	南側調査区でのIII層遺構掘下げ。
12/8	南側調査区及びIII層全景撮影。土層断面、平面図作成。機材撤収。
12/12	重機による礎石掘え方下部の根石除去立会い。調査終了。

本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点3-091(X:-20748.301・Y:2686.028)と同3-092(X:-210583.137・Y:2720.303)である。これにより調査対象地南西のX:-210833.000・Y:2820.000の地点にNOE0杭を設定し、東西ライン（X軸）に南から1mごとにN1～20と、南北ライン（Y軸）に西から1mごとにE1～20と附した（第7図）。各グリッドライン間の距離は4mである。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

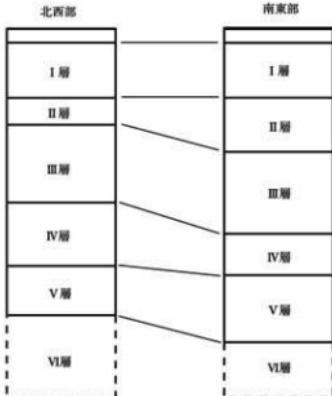
出土品の整理作業・報告書の作成は2008年9月1日から12月26日にかけて岩沼市文化財展示室内で行なった。

2. 基本土層（第4図）

本地点で確認された土層は以下のとおりである。なお、I、II層は整地面であることから概ね水平堆積であったが、III層以下では若干北から南、西から東へかけての傾斜が見られた。

これは調査地の南側で東流する内矢来堀の前身である自然流路の影響が考えられる。

- I層 暗褐色シルト
向唐門建築時の整地層
- II層 暗褐色砂質シルト
整地層
- III層 暗褐色粘質シルト
- IV層 黒褐色粘質シルト
- V層 黒褐色粘質シルト
- VI層 青灰色粘質シルト



第4図 基本土層模式図

第三章 発見された遺構と遺物

本地点では第2章で述べたように調査開始以前に実施した試掘調査によって、少なくとも大別すると向唐門建築期(I層上)、向唐門建築以前の整地面(II層上)の2時期の存在が明らかになっていたが、調査区内では耐震補強のための鉄骨を配する部分、及び礎石下の補強を実施することにより南北の礎石列それぞれを結ぶ部分でII層以下の調査を実施したところ、時期差のある遺構面の存在が確認されている。以下に発見遺構・出土遺物について、それぞれが確認された遺構面ごとに記述していく。

1. 向唐門建築期(I層上)

a. 向唐門礎石列（第5図・第6図）

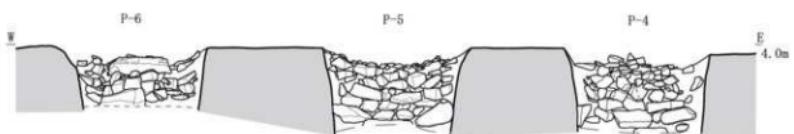
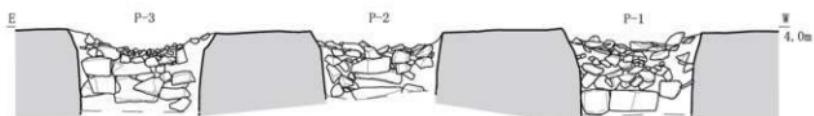
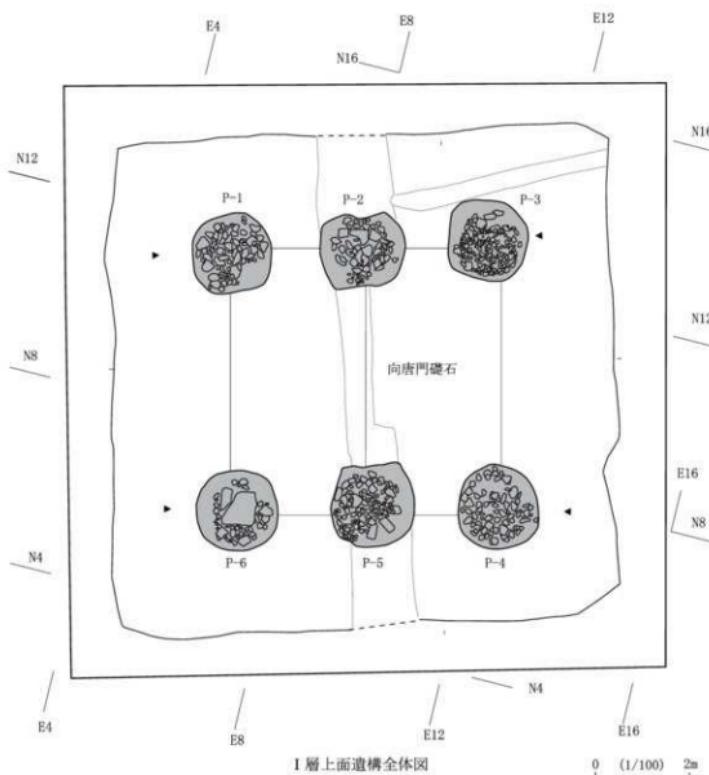
調査区中央に位置する6基の礎石で成立する門である。東西二間、南北一間の単層四脚門で、平面規模は西側柱列で桁行總長5.5m、南側柱列で梁行總長5.5m、推定建物面積は30.25 m²を測る。主軸方位は75°東へ傾く。屋根の正面は唐破風を見せた向唐門であり、棟札は現存しないものの天保13年(1842)に造営されたことが柱の銅版根巻に残る銘から確認できる。破風の壁に、雲龍の彫刻、欄間に波の彫刻、唐獅子の木鼻、虹梁をうける雲龍の籠影等彫刻に富んでいる。また正面には三条実美的筆からなる石製扁額が掲げられるなど、屋根の総重量は約40t以上に上ると推察されている。県内では他に類を見ない規模の向唐門であることから平成2年に岩沼市の指定文化財に指定されている。

この向唐門は建築当初は茅葺であったが、その後銅板葺きへと変更されている。また現状で見られる四半敷も参道及び拝殿前、楼門と同質の石材を使用していることから、大正九年頃に実施されたと考えられる参道改修工事の所産であり、建築当初の姿とは異なっている。

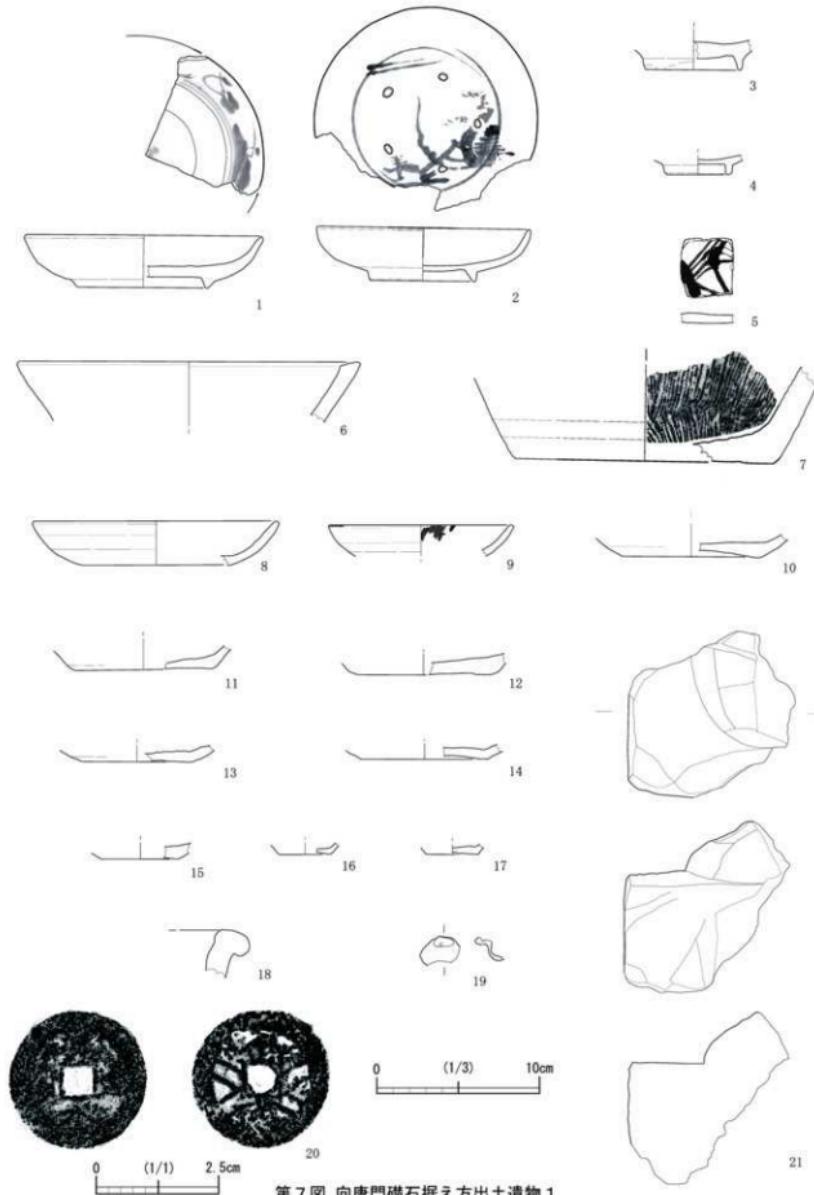
柱材は一辺が約40cmの方形であり、角を狭く面取りしている。柱材の底面中央とこれを受ける角型礎盤石には一辺が6cmのボゾ穴があり、中には腐食した木材片が残存していたことから、この腐食木片はダボのような役割を果たしていたと考えられる。同様に礎盤石と角型座布団石、そして座布団石と礎石にも同様の穴と腐食木片が見られたことから、これらは各部を同様の技法を用いて連結していたことが明らかとなった。

礎石は地表面に露出して柱受けとなる面では方形状に極めて丁寧な整形を行っているが、礎石除去の際に確認したところ、地中へ埋められているこれ以外の面では自然面を残していることが明らかとなつた。また微細な加工は礎石を据えてから行ったようであり、礎石付近の覆土最上面には礎石と同質の石材片が多数認められた。礎石の規模は概ね長軸70cm、最大厚は45cmを測る。

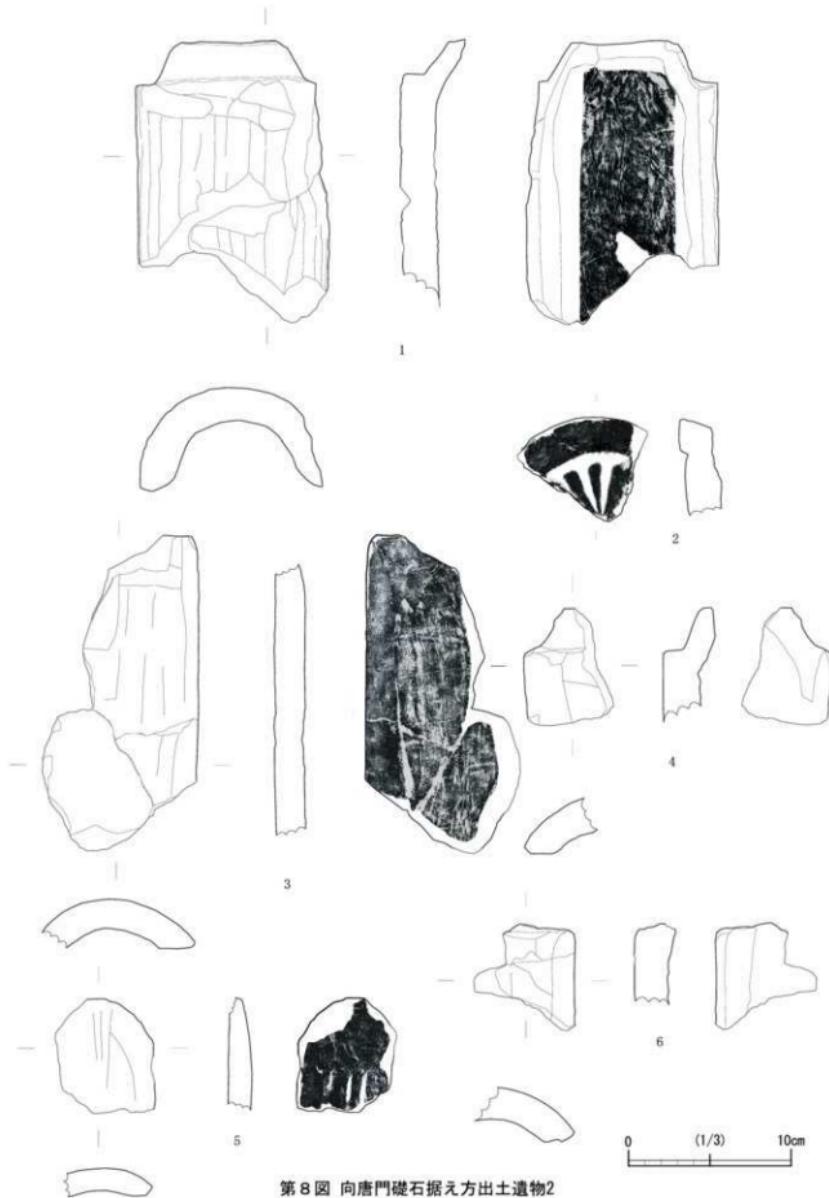
礎石据え方は6穴存在し、向唐門建築時に盛られたと考えられる整地層(I層)を掘り込んでいる。この整地層は暗褐色シルトや黒褐色シルトを主体としており、上面の海拔は3.9mを測る。据え方の平面形は長軸1.5~1.7m、短軸1.5mほどで円形及び略円形である。また整地面からの掘り込みも概ね1.7mほどであり、下位にいくほど径50~70cmほどの安山岩大塊を主体



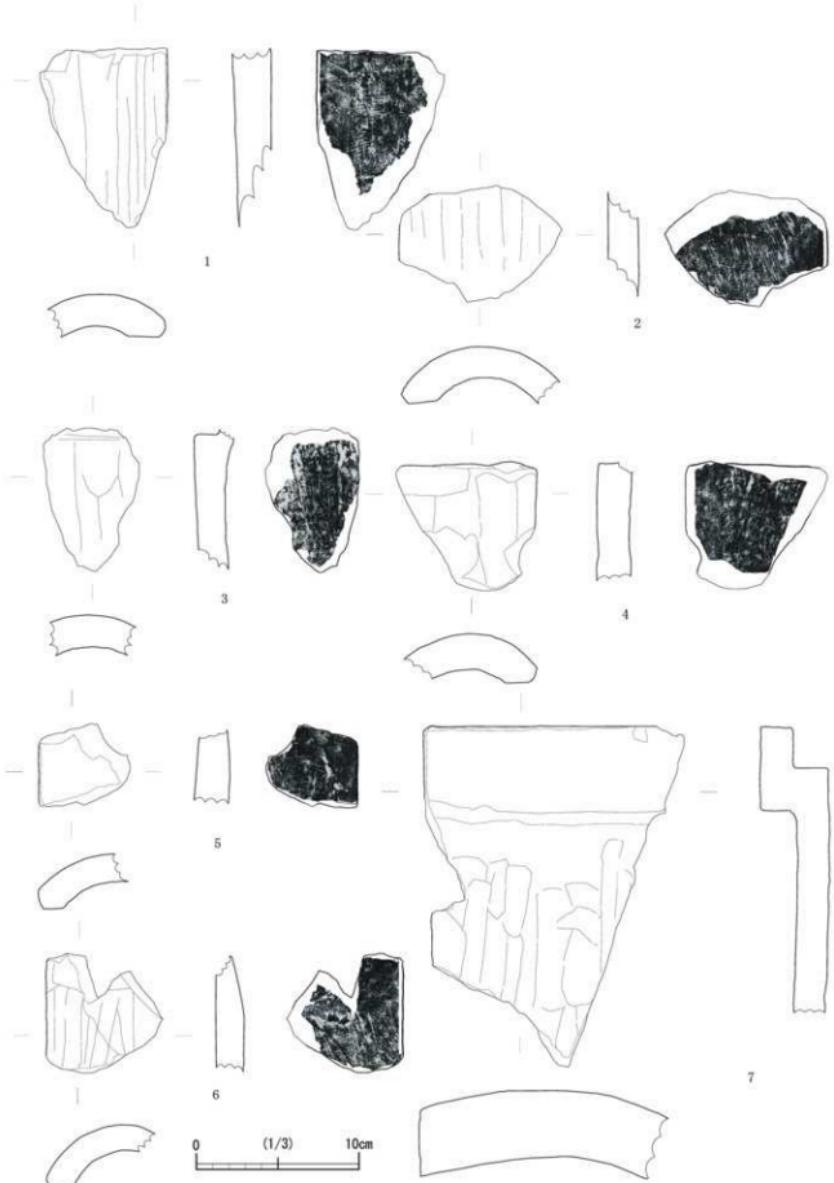
第6図 I層上面遺構図



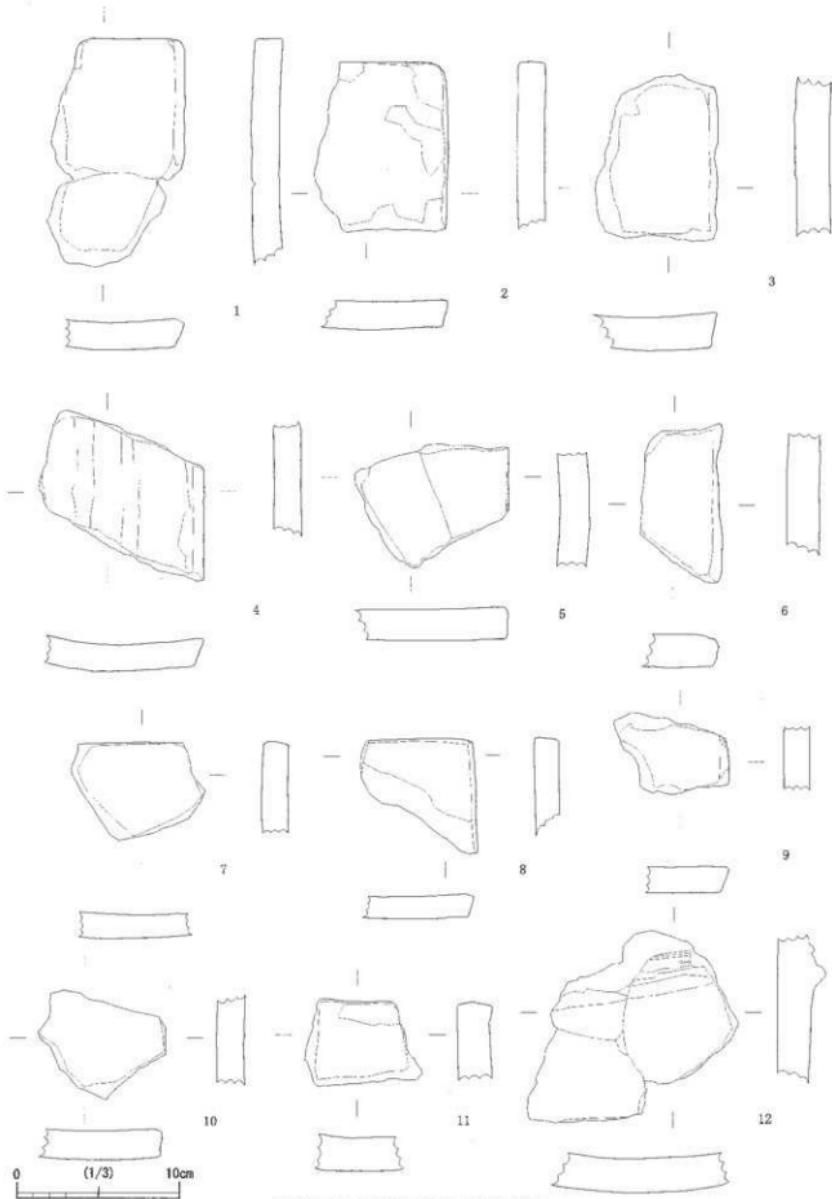
第7図 向唐門礎石据え方出土遺物 1



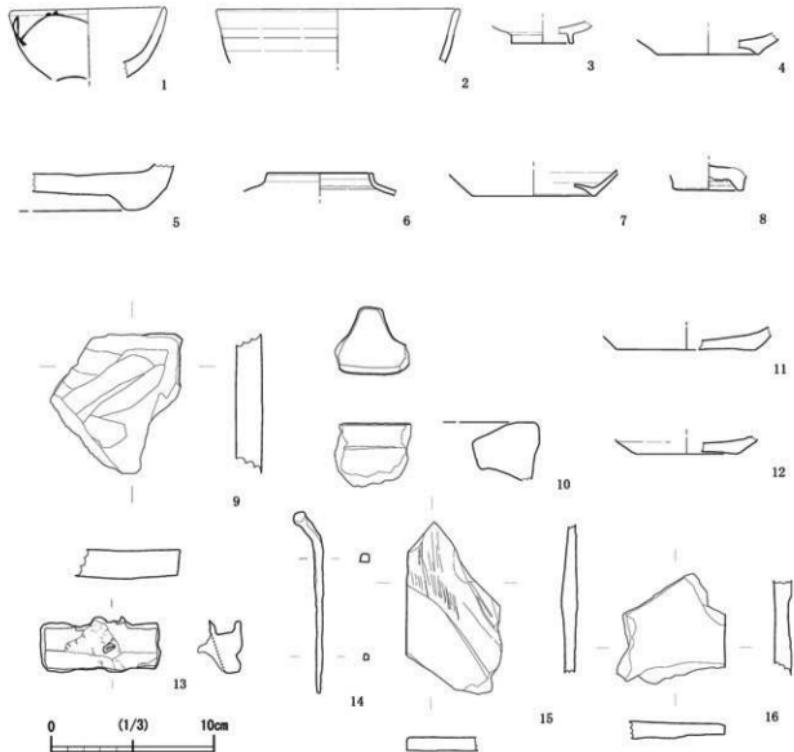
第8図 向唐門礎石据え方出土遺物2



第9図 向唐門礎石据え方出土遺物3



第10図 向唐門礎石据え方出土遺物4



第11図 I層構築土出土遺物

的に充填していることは共通する。しかしながら、礎石据え方内の上部根石の積み込み状況は異なる状況を呈している。それぞれの柱毎に見ていくと、P1では安山岩を主とする角礫塊、P2では凝灰岩小塊、P3では安山岩を主とする角礫片と瓦片、P4では安山岩を主とする角礫片と凝灰岩小塊、P5では凝灰岩小塊、P6では安山岩塊となる。このうちP3では上面で瓦片、かわらけ片などの小細片が多く含まれ、またP6では礎石の加工途中に破損したと考えられる安山岩大塊が含まれている。なお、掘下げる時には破損した石碑や石塔が根石に転用されている可能性を念頭に置いて調査にあたったが、図7のP3から出土した石塔の笠部と考えられる石製品以外にはP1中層から出土した石塔の台石と考えられる製品が1点出土したのみであった。

出土遺物（第7～10図）

遺物はP1～P6のすべてで出土しているが、その中でも圧倒的にP3が多く出土している。据え方より出土した遺物の内訳は瓦が145点、かわらけが30点、陶器が22点、磁器が6点、瓦質土器が2点、金属製品、土製品、石製品が各1点であり、瓦が最も多く出土している。竹

駒神社では平成二年に焼失した拝殿・幣殿・本殿、現存する楼門という江戸時代に作られた建造物には瓦は使用されていない。また境内を中心に描く所謂「境内図」は未発見であるものの、幾種類かの江戸期に描かれた古絵図でも瓦葺の施設は描かれていない。しかしながら、多量に出土した瓦について、他所からの持込を想定するよりは境内において解をはじめとする何らかの施設で使用していた瓦を根石と共に埋め込んだと捉えるのが妥当と思われる。

b.遺構出土遺物（第 11 図）

遺構精査時、及び向唐門の建築に際して盛土された整地層を掘下げた際に出土した遺物である。これらの作業時には磁器 13 点、陶器 22 点、瓦 120 点、瓦質土器 2 点などが出土している。このうち最も多く出土したものは陶器と瓦であり、陶器では大堀相馬系の碗が多く、また瓦では小破片のため特定は困難なものも含まれるが概ね平瓦が多く見受けられた。

2. 向唐門建築以前の整地面（II 層上）（第 12 図）

向唐門建築時に盛られたと考えられる整地層（I 層）を 20 cm ほど掘下げて確認した遺構面である。I 層は調査区中央からほぼ同心円状に黒褐色シルト、次いで暗褐色シルトを盛土として用い、東西南北の四方でさらにぶい黄褐色シルトを含む暗褐色シルトなどで形成されるが、外縁部では四半敷造成の際の搅乱によって大きく損なわれており、整地の工法の全容は明らかではない。しかしながら搅乱を免れた部分では良好な遺構面が遺存しており、ここでは掘立柱建物跡 3 棟、柱列跡 3 列、旧参道と考えられる通路状遺構、土坑 4 基、不明遺構 2 基のほかビット 38 口を確認した。なお、遺構検出面とした II 層は暗褐色砂質シルトを主体的に用いて形成され、全体的に良好に縮まる。また調査区内では海拔約 3.8m 前後と概ね水平に整地が行われている。

a.掘立柱建物跡

SB01 掘立柱建物跡（第 13・14 図）

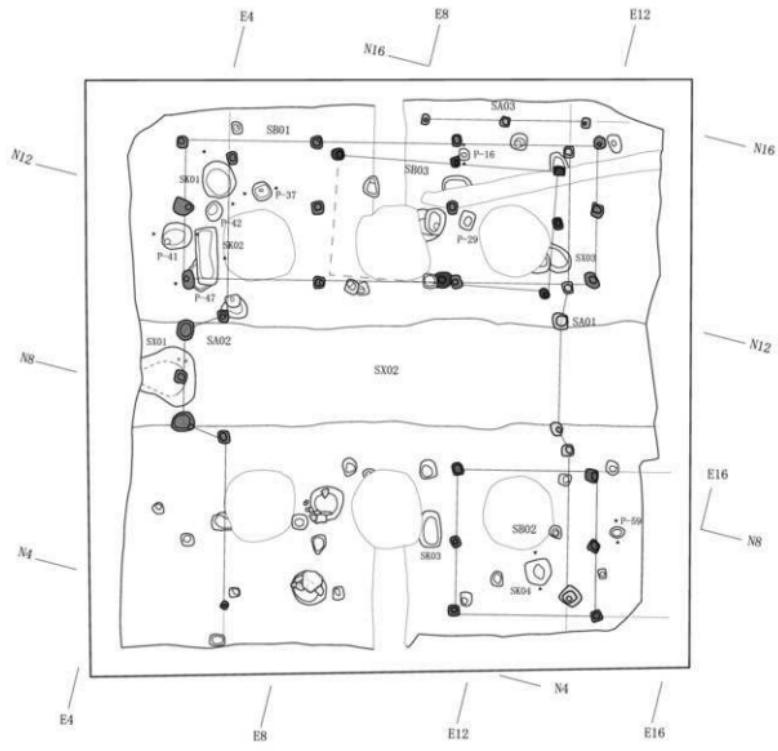
調査区北部に位置する東西 3 間、南北 2 間の東西棟である。SB03 掘立柱建物跡と重複関係にあり、これより新しい。SA01・SA02 柱列跡などとの重複については直接切り合わないため新旧関係は不明である。

平面規模は北側柱列で桁行総長 8.6m、西側柱列で梁行総長 2.8m、推定建物面積は 24.08 m² である。主軸方位は 76° 東へ傾く。柱穴は 12ヶ所を検出し、すべてで柱痕跡を確認している。掘方は長軸 20~40cm、短軸 20~31cm の円形もしくは楕円形で、深さはおよそ 26~65cm である。掘方埋土は炭化物、焼土粒を含む黒褐色・暗褐色シルトである。柱痕跡は径 6~10cm 程度の円形を呈し、黒褐色シルトである。

遺物は掘方埋土から肥前磁器皿、大堀相馬焼碗、小野相馬焼鉢、丸瓦、平瓦、瓦質土器、かわらけが出土している。

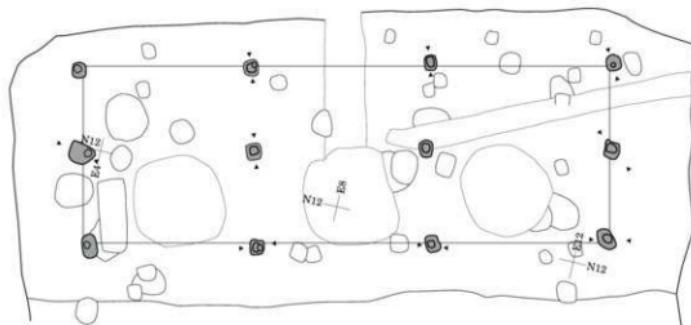
SB02 掘立柱建物跡（第 15・16 図）

調査区南東部に位置する南北 2 間、東西 1 間以上の推定東西棟である。SA01 柱列跡と重複するが、直接的に切り合わず、新旧関係は不明である。平面規模は西側柱列で梁行総長 3.0m

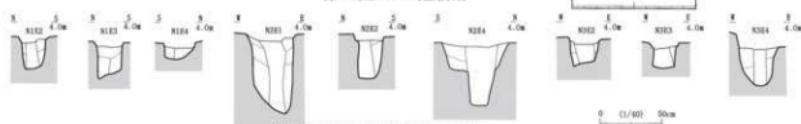


第12図 II層上面遺構図

0 (1/100) 2m



第13図 SB01建物跡



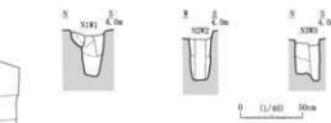
第14図 SB01建物跡柱穴断面



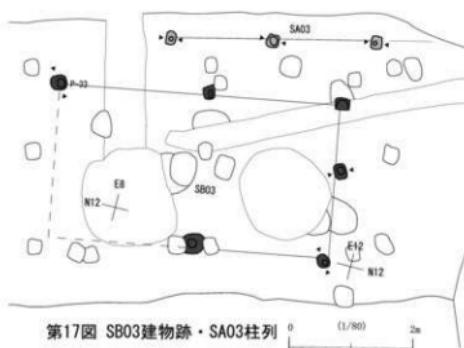
第16図 SB02建物跡柱穴断面



第15図 SB02建物跡



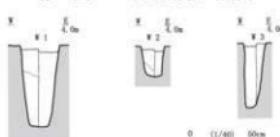
第17図 SB03建物跡・SA03柱列



第17図 SB03建物跡・SA03柱列



第18図 SB03建物跡柱穴断面



第19図 SA03柱列跡柱穴断面

を測る。主軸方位は77° 東へ傾く。柱穴は6穴が確認でき、うち5ヶ所で柱痕跡がみとめられた。柱穴の規模は長軸20~29cm、短軸20~26cm、確認面からの深さは39~50cmほどであり、平面形は円形、楕円形、隅丸方形と様々である。柱痕跡は径6~9cm程度の円形である。なお、柱痕跡には掘方底面より沈み込むものがある。掘方埋土は黒褐色、暗褐色のシルトで、炭化物を若干含む。

遺物は大堀相馬焼碗・皿、在地産陶器と考えられる擂鉢、平瓦が出土している。

SB03 挖立柱建物跡(第17・18・24図)

調査区北部に位置する東西2間、南北2間の東西棟である。SB01 挖立柱建物跡と重複関係にあり、これより古い。

平面規模は北側柱列で桁行総長4.6m、東側柱列で梁行総長2.5m、推定建物面積は11.50m²である。主軸方位は79° 東へ傾く。柱穴は12ヶ所を検出し、すべてで柱痕跡を確認している。掘方は長軸20~27cm、短軸17~33cmの円形もしくは楕円形で、深さはおよそ27~63cmである。掘方埋土は炭化物、凝灰岩粒などを含む黒褐色シルトである。柱痕跡は径6~10cm程度の円形を呈し、黒褐色シルトである。

遺物は掘方埋土から大堀相馬陶器碗が出土している。

b.柱列跡

SA01 柱列跡(第20・21・24図)

調査区東側に位置する。SB01 挖立柱建物跡、SB02 挖立柱建物跡、SA03 柱列跡と重複するが、直接的に切り合わず、新旧関係は不明である。

本址は調査区中央で東西方向に走る旧参道と考えられる通路状遺構を境に南北両地区で同様の展開が見られることから、境内において本殿を中心とする重要な聖域とそれ以外の境界を示す塀などの区画施設であると考えられる。

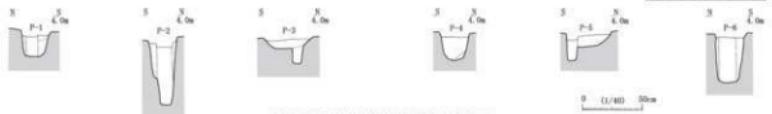
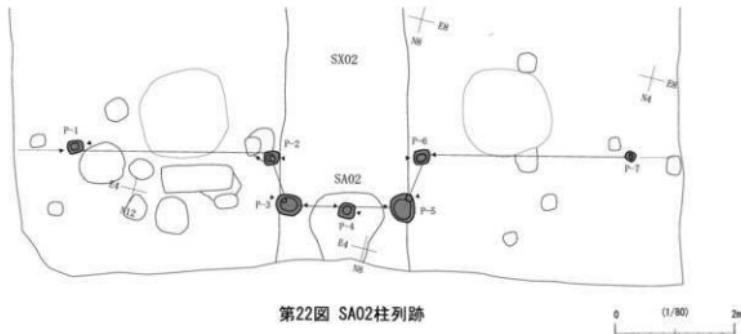
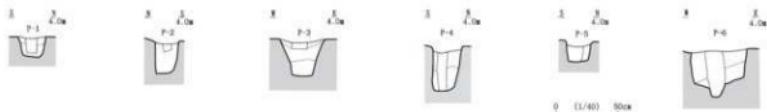
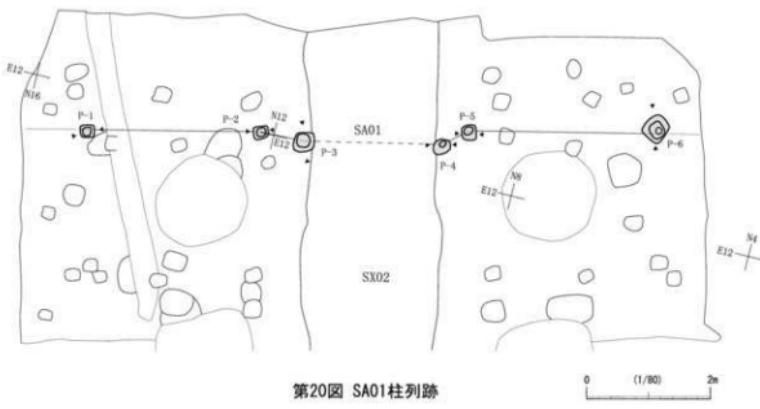
確認した柱列の規模は総長9.5mで、柱穴は6穴であり、うち5穴で柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸21~45cm、短軸18~45cm、確認面からの深さは27~38cmほどであり、平面形は円形乃至楕円形である。柱痕跡は径6~10cmの円形である。主軸方位は13° 西へ傾く。掘方埋土は黒褐色シルトで、炭化物やにぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。

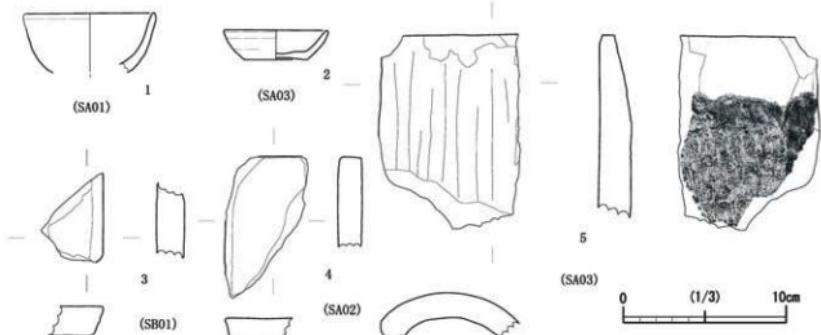
遺物は產地不明陶器碗、在地産陶器擂鉢、かわらけ片が出土している。

SA02 柱列跡(第22・23・24図)

調査区西側に位置する。SX01 不明遺構と重複し、これより古い。また SB01 挖立柱建物跡と重複するが、直接的に切り合わず、新旧関係は不明である。

本址も SA01 柱列跡と同様に旧参道と考えられる通路状遺構を境に南北両地区で同様の展開が見られることから、本殿を中心とする重要な聖域とそれ以外の境界を示す塀などの区画施設であると考えられるが、通路状遺構上にも1穴存在することから木戸のような役割を果たしていた可能性も考慮できる。また SA01 柱列跡とは直線距離で約7mほどしか離れておらず、同時期に両者が存在していた可能性は低いと考えられるが、これらの新旧関係は明らかではない。





第24図 II層上面掘立柱建物跡・柱列跡出土遺物

確認した柱列の規模は総長 11.3m で、柱穴は 7 穴であり、うち 6 穴で柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸 16~50cm、短軸 15~38cm、確認面からの深さは 20~51cm ほどであり、平面形は円形乃至梢円形である。なお、SX02 旧参道跡上に存在する柱穴の掘り方はいずれも約 20cm ほどと浅い。柱痕跡は径 6~10cm の円形である。主軸方位は 14° 西へ傾く。掘方埋土は黒褐シルトで、炭化物や焼土粒、にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。

遺物はかわらけ、平瓦片が出土している。

S0A3 柱跡跡(第 17・19・24 図)

調査区北側に位置する。本址は南側に近接する SB01 掘立柱建物跡と柱筋の方向が一致することから、これに付随した堀などの施設であると考えられる。

確認した柱列の規模は総長 3.4m で、柱穴は 3 穴であり、その全てで柱痕跡がみられる。柱穴の規模は長軸 20cm、短軸 17~20cm、確認面からの深さは 23~60cm ほどであり、平面形は円形乃至梢円形である。柱痕跡は径 6~10cm の円形である。主軸方位は 76° 東へ傾く。掘方埋土は黒褐シルトで、炭化物やにぶい黄褐色粘土ブロック、凝灰岩粒を少量含む。

遺物は肥前磁器瓶、瀬戸美濃産皿、瓦質土器焜炉、かわらけ、丸瓦片などが出土している。

c.通路状遺構

SX02 旧参道跡 (第 12・27・31 図)

調査区中央に位置し、東西軸に走方向を有する。SA01 柱跡跡、SA02 柱跡跡と重複し、両者より古い。東西の両端は四半敷造作の際に搅乱を受けており、確認された残存部の総延長は約 10.8m、最大幅は 2.2m を測る。主軸方位は 75° 東へ傾く。側溝等の付帯施設は存在していない。

本址では先に述べたように溝等の付帯施設は存在しない。またその路面は石畳や版築などによって形成されておらず、第 31 図に示した土層を観察するために設定したトレーナーでは、II

層と路面構成土の比較をした場合、II層の方が固く縮まっていた。しかしながらこの縮まりに欠ける土層はII層上面の遺構精査時には明瞭に土色の違いが認められ、その走方向の東側延長線上には樓門が、そして西側延長線上には押殿へ至ることが確実視されることから旧参道である可能性が高い。

d.土坑

SK01 土坑(第 25 図)

調査区北西部に位置する。本址と重複する遺構は無い。平面形状は楕円形であり、規模は長軸 78cm、短軸 74cm を測る。確認面からの深さは 54cm であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は 5 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK02 土坑(第 25・27 図)

調査区北西部に位置する。本址は P-47 と重複関係にあり、これより古い。平面形状は長方形であり、規模は長軸 115cm、短軸 43cm を測る。確認面からの深さは 52cm であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は 6 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、大堀相馬焼皿・瓶、小野相馬焼鉢、志野焼皿、瀬戸美濃産鉢、かわらけ、丸瓦・平瓦片のほか須恵器甕片が 1 点出土している。

SK03 土坑(第 12 図)

調査区中央部南側に位置する。本址は向唐門礎石据え方により一部を失うが、平面形状は楕円形であり、規模は長軸 78cm、短軸 46cm を測る。確認面からの深さは 50cm であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は 4 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK04 土坑(第 25 図)

調査区南東部に位置する。本址と重複する遺構は無い。平面形状は不整形であり、規模は長軸 53 cm、短軸 53 cm を測る。確認面からの深さは 44cm であり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は 3 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、かわらけ片が 1 点出土している。

e.性格不明遺構

SX01 性格不明遺構(第 25・27 図)

調査区西部に位置する。本址は SA02 柱列跡・SX02 旧参道跡と重複し、前者より古く、後者より新しい。平面形状は不整形であるが、西側の一部は四半敷造作時に損なわれているため、規模については不明な点がある。確認面からの深さは 20cm であり、断面形状は皿型を呈する。堆積土は 7 層に細分でき、全て人為的埋土である。この遺構は押殿の眼前の参道上であり、覆土はその大部分に焼土ブロックを含み、また底面には杭を刺したような痕跡が 2箇所認められていることから何らかの祭祀を執り行った可能性も考慮される。



第25図 II層上面土坑・ピット

0 (1/40) 1m

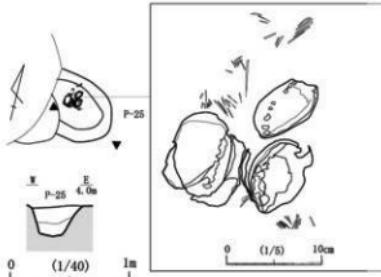
遺物は、大堀相馬焼碗片が出土している。

SX03 性格不明遺構(第26図)

調査区北東部に位置する。I層で確認されている向唐門礎石据え方に西側を切られるため、平面形状、長軸については不明な点があるが、短軸は57cmを測る。確認面からの深さは52cmであり、断面形状は皿型を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする2層に細分でき、全て人為的埋土である。

この覆土中の1層と2層の境付近からはアワビ貝と植物遺体が確認されている。アワビ貝の

遺存状態は劣悪であったものの殻長が約8~10cmほどで、計7個体ほどがほぼ一塊となって検出された。検出状態は正位の状態で重なった状態のものが5個体、そしてその周囲で同様に正位の状態のものがそれぞれ1個体ずつである。またアワビ貝の直下及び周囲からは先端が細く尖る植物遺体が散見できたが、その形状的特徴からマツを代表とする針葉樹であると考えられる。この遺構内からは他に遺物の出土は無いが、遺構の性格としては何らかの神事に関わる遺構、もしくは神事を執り行ったあとでの廃棄遺構と考えられる。



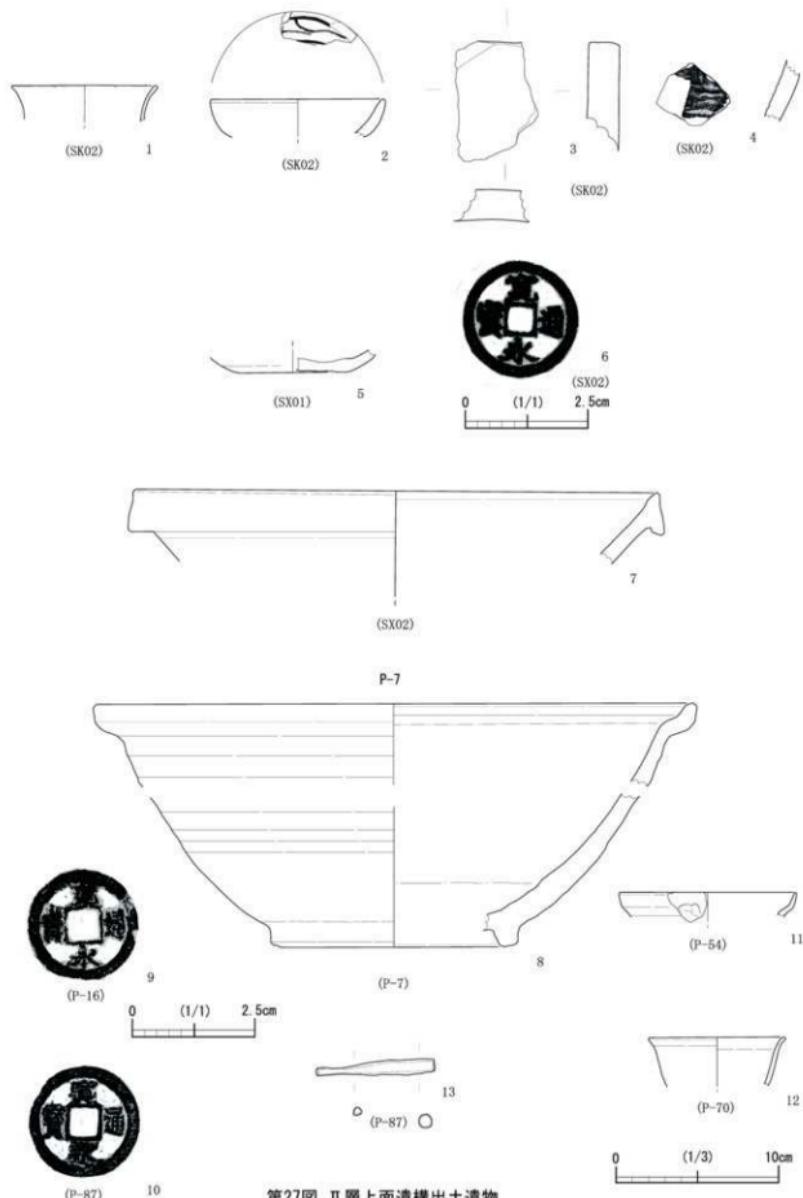
第26図 SX03不明遺構アワビ出土状況

f. ピット

II層上では掘立柱建物跡や柱列として取り扱えない柱穴を38口確認した。これらの中には明瞭に柱痕跡を留めるものも含まれることから、調査区外に存在する掘立柱建物跡などの一部と考えられるが、調査区内での復元は困難であり、一括して表を附す。

第2表 II層上面ピット属性表

ピット番号	長軸	短軸	深さ	覆土	形狀	備考
P-7	37cm	25cm	37cm	に黄褐色シルト	長方形	小野相馬鉢・堤系甕出土
P-11	—	35cm	24cm	黒褐色シルト	不整形	
P-13	—	—	34cm	黒褐色シルト	不明	
P-14	20cm	17cm	24cm	暗褐色シルト	方形	
P-16	21cm	21cm	42cm	黒褐色シルト	方形	瀬戸美濃系皿・寛永通寶出土
P-26	—	—	12cm	黒褐色シルト	不明	
P-28	30cm	30cm	45cm	黒褐色シルト	方形	
P-29	36cm	—	39cm	暗褐色シルト	不明	
P-30	—	23cm	28cm	に黄褐色シルト	不明	
P-31	30cm	30cm	59cm	黒褐色シルト	方形	
P-32	40cm	33cm	41cm	暗褐色シルト	円形	肥前系磁器皿出土



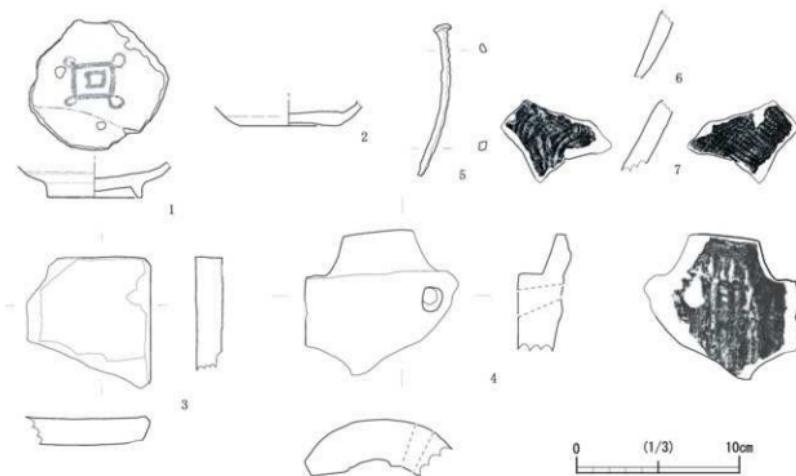
第27図 II層上面遺構出土遺物

P-37	38cm	30cm	16cm	暗褐色シルト	長円形	
P-38	21cm	21cm	45cm	黒褐色シルト	方形	
P-41	60cm	53cm	72cm	黒褐色シルト	不整形	
P-42	40cm	—	41cm	に黄褐色シルト	不明	
P-45	30cm	25cm	61cm	暗褐色シルト	円形	
P-47	55cm	—	7cm	黒褐色シルト	不明	
P-48	—	45cm	70cm	黒褐色シルト	不明	
P-52	—	35cm	39cm	に黄褐色シルト	不明	
P-54	33cm	25cm	21cm	黒褐色シルト	円形	瀬戸美濃系皿出土
P-57	24cm	22cm	28cm	黒褐色シルト	方形	
P-59	34cm	24cm	16cm	黒褐色シルト	長円形	肥前系磁器皿、平瓦出土
P-61	20cm	17cm	54cm	黒褐色シルト	方形	肥前系磁器碗出土
P-63	30cm	25cm	45cm	暗褐色シルト	円形	
P-66	30cm	22cm	24cm	黒褐色シルト	不整形	
P-68	30cm	23cm	68cm	暗褐色シルト	長方形	
P-70	35cm	18cm	49cm	黒褐色シルト	円形	不明陶器鉢、肥前系磁器鉢出土
P-71	—	—	14cm	黒褐色シルト	不明	
P-74	25cm	22cm	38cm	に黄褐色シルト	方形	
P-75	35cm	27cm	45cm	暗褐色シルト	長方形	
P-76	30cm	22cm	36cm	暗褐色シルト	方形	
P-78	20cm	20cm	40cm	暗褐色シルト	方形	
P-79	25cm	23cm	41cm	暗褐色シルト	方形	
P-80	23cm	22cm	46cm	黒褐色シルト	円形	
P-82	52cm	40cm	46cm	暗褐色シルト	長方形	大堀相馬系碗出土
P-84	36cm	31cm	50cm	黒褐色シルト	溝丸方形	肥前系磁器鉢、平瓦出土
P-85	38cm	36cm	46cm	暗褐色シルト	方形	
P-87	—	—	10cm	黒褐色シルト	不明	煙管吸口・寛永通寶出土

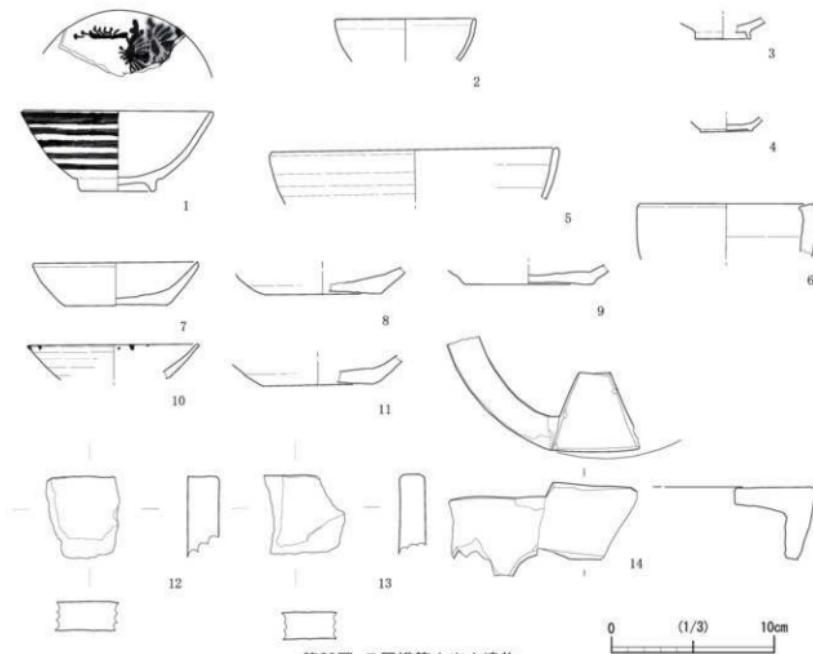
g.遺構外出土遺物(第 28・29 図)

第 28 図は遺構精査時に出土遺物であり、近世磁器、近世陶器、かわらけ、瓦、金属製品、中世陶器、古代遺物などが出土しているが、全体量は概して少ない。このうち第 28 図 1 の唐津産陶器鉢は、SX02 旧参道跡の北側の硬化範囲に逆位で貼り付くようにして出土している。

第 29 図は整地面である II 層を構築する際に混入した遺物であり、近世磁器、近世陶器、かわらけ、金属製品、中世貿易陶磁などが出土しているが、全体量は概して少ない。



第28図 II層上遺構外出土遺物



第29図 II層構築土出土遺物

3. II層以下の遺構群（III層上）(第30図)

II層以下の調査については、向唐門の耐震性を高めるために新たに設置する鉄骨のベース部分、及び柱の沈下を防ぐために礎石列を補強する箇所で実施しており、全面的な調査は実施していない。しかしながら限られた範囲内においても、種々の新知見を得ることができた。

向唐門建築以前に境内域を整備した際に盛られたと考えられる整地層（II層）を5～20cmほど掘下げると、地山である暗褐色粘質シルトが存在しており、この上面で確認した遺構群をIII層上の遺構群とした。ここでは土坑16基、溝跡2条のほか、ピット22口を確認している。なお、遺構検出面としたIII層は調査区の南北で検出海拔に違いが認められ、II層とした江戸期における境内整備期に盛土や削平などの改変が行われたと考えられる。また遺構の切合、出土遺物の年代観からも同一層上の検出ではあるが、それぞれの遺構の帰属時期には差異が生じていることから、ここで報告する遺構については複数期の遺構が混在していると考えられる。

a. 土坑

SK05 土坑(第32図)

調査区北東部に位置する。確認面において本址と重複する遺構は無い。西側の一部は向唐門礎石据え方によって失うが、平面形状は方形であり、規模は長軸105cm、短軸100cmを測る。確認面からの深さは54cmであり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は8層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、大堀相馬焼碗、産地不明陶器鉢、かわらけ、丸瓦、平瓦片が出土している。

SK06 土坑(第32・34図)

調査区北東部に位置する。確認面において本址と重複する遺構は無い。南東隅部は向唐門礎石据え方によって失われ、北側は調査区外へ展開するため全体形状や長軸は不明であるが、短軸85cmを測る。確認面からの深さは64cmであり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は8層に細分でき、下層は自然堆積、上層は人為的埋土である。

なお、本址は主軸方位が後述するSD02溝跡とほぼ同じであり、同一の区画を形成する溝跡になる可能性も考慮される。

遺物は、大堀相馬焼碗、肥前磁器碗・鉢、かわらけ、丸瓦片が出土しているが、すべて最上層からの出土である。

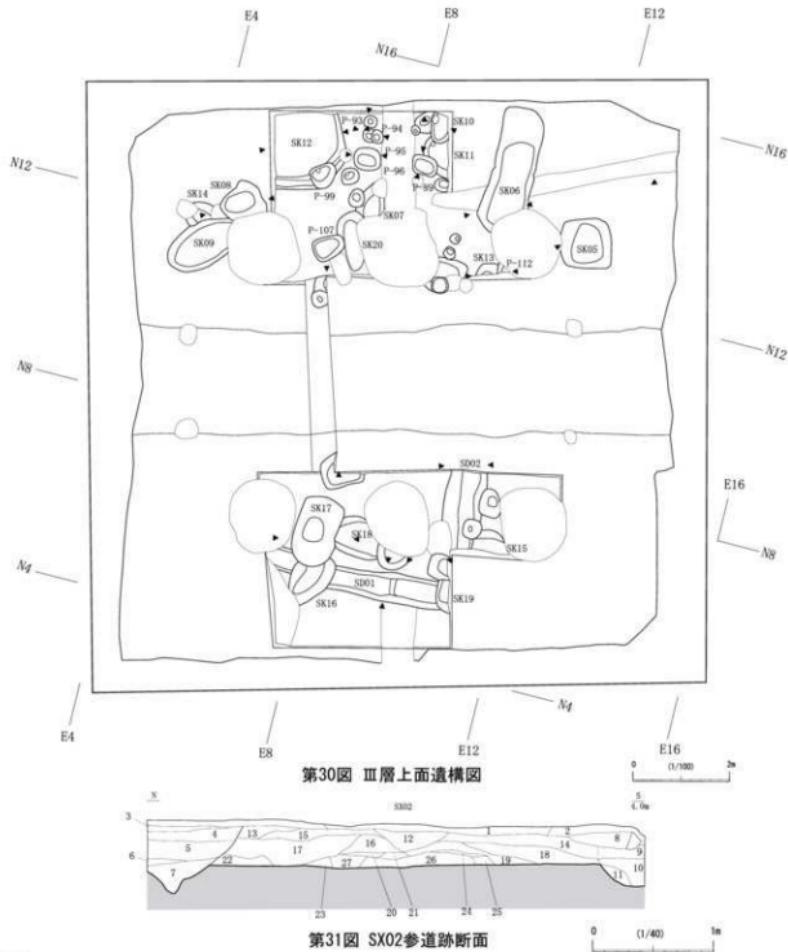
SK07 土坑(第30図)

調査区中央部北側に位置する。本址は確認面においてP-98、SK20土坑と重複し、これらより古い。また向唐門礎石据え方に南側を、搅乱によって東側を失うため、全体の形状・規模とともに不明である。確認面からの深さは31cmであり、断面形状は浅い皿形を呈する。堆積土は2層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK08 土坑(第32・34図)

調査区北西部に位置する。確認面においてはSK09土坑と重複し、これより新しい。南側の



SX02

No.	土色	土質	調り	備考
1	暗褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物少く含む。2面多道。
2	暗褐色	砂質シルト	強い	礁土粒・炭化物少く含む。2面構造土。
3	暗褐色	砂質シルト		礁土粒少く含む。2面構造土。
4	暗褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物・礁土粒を散見。
5	褐色灰土	粘質シルト	やや弱い	炭化物少く含む。被熟成鉄あり。
6	暗褐色	粘質シルト	弱い	礁土粒微量含む。
7	暗褐色	粘質シルト	弱い	炭化物微量含む。
8	黒褐色	粘質シルト	やや弱い	炭化物微量含む。
9	暗褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物微量含む。
10	暗褐色	粘質シルト	弱い	炭化物や多く含む。にせい黄褐色粘土ブロック多く含む。
11	黒褐色	粘質シルト	やや強い	礁褐色粘土多く含む。
12	暗褐色	粘質シルト	やや弱い	礁褐色粘土多く含む。(漂砾出露部)
13	にせい黄褐色	粘質シルト	やや弱い	礁褐色粘土や多く含む。
14	暗褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物微量含む。其褐色粘土若干含む。

No.	土色	土質	調り	備考
15	暗褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物微量含む。黄褐色粘土を若干含む。
16	暗褐色	粘質シルト	やや強い	炭化物・礁褐色粘土を少く含む。
17	暗褐色	粘質シルト	やや弱い	黄褐色粘土やや多く含む。
18	暗褐色	粘質シルト	やや弱い	黄褐色粘土やや多く含む。
19	黄褐色	粘質シルト	やや弱い	暗褐色シルト少量含む。
20	黒褐色	粘質シルト	やや強い	黄褐色粘土少量含む。
21	黒褐色	粘質シルト	やや強い	黄褐色粘土微量含む。
22	黒褐色	粘質シルト	弱い	旧土。
23	黒褐色	粘質シルト	弱い	旧土。
24	黒褐色	粘質シルト	やや強い	黄褐色粘土微量含む。
25	黒褐色	粘質シルト	弱い	旧土。
26	黒褐色	粘質シルト	弱い	旧土。
27	暗褐色	粘質シルト	やや弱い	黄褐色粘土多量含む。

一部を向唐門礎石据え方により失うが、平面形状は不整方形であり、規模は長軸 86cm を測る。確認面からの深さは 63cm であり、断面形状は緩やかな U 字形を呈する。堆積土は 7 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は小野相馬焼鉢片が出土している。

SK09 土坑(第 30・34 図)

調査区北西部に位置する。確認面においては SK08 土坑と重複し、これより古い。東側の一部を向唐門礎石据え方により失うため全体の形状・規模は不明な点があるが、平面形状は長円形と推定され、規模は短軸 88cm を測る。確認面からの深さは 55cm であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は 7 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、大堀相馬焼碗、肥前磁器碗、かわらけ、平瓦片が出土している。

SK10 土坑(第 33 図)

調査区中央部北側に位置する。確認面においては SK11 土坑・P-92 と重複し、これらより新しい。遺構の北東部は調査区外へ展開するため平面形状・規模は不明である。確認面からの深さは 26cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は 5 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK11 土坑(第 30・34 図)

調査区中央部北側に位置する。確認面においては SK10 土坑・P-89 と重複し、これらより古い。また東側は調査区外へ展開するため、平面形状・規模は不明である。確認面からの深さは 33cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積土は 3 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、小野相馬焼碗、志野焼皿、かわらけ、平瓦片が出土している。

SK12 土坑(第 32・34・35 図)

調査区中央部北側に位置する。確認面においては P-99 と重複し、これより古い。遺構の北部及び西部は調査区外へ展開するため平面形状・規模は不明である。確認面からの深さは 36cm であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は 4 層に細分でき、全て人為的埋土である。なお、南辺から南西にかけては遺構確認面の中程で幅 20cm ほどの段を有する。

遺物は、覆土中より遺存状態は劣悪なものの貝殻片が出土したほか、大堀相馬焼碗、瀬戸美濃焼皿、肥前磁器皿、かわらけ、中世陶器甕、須恵器甕片、古銭、石器が出土している。

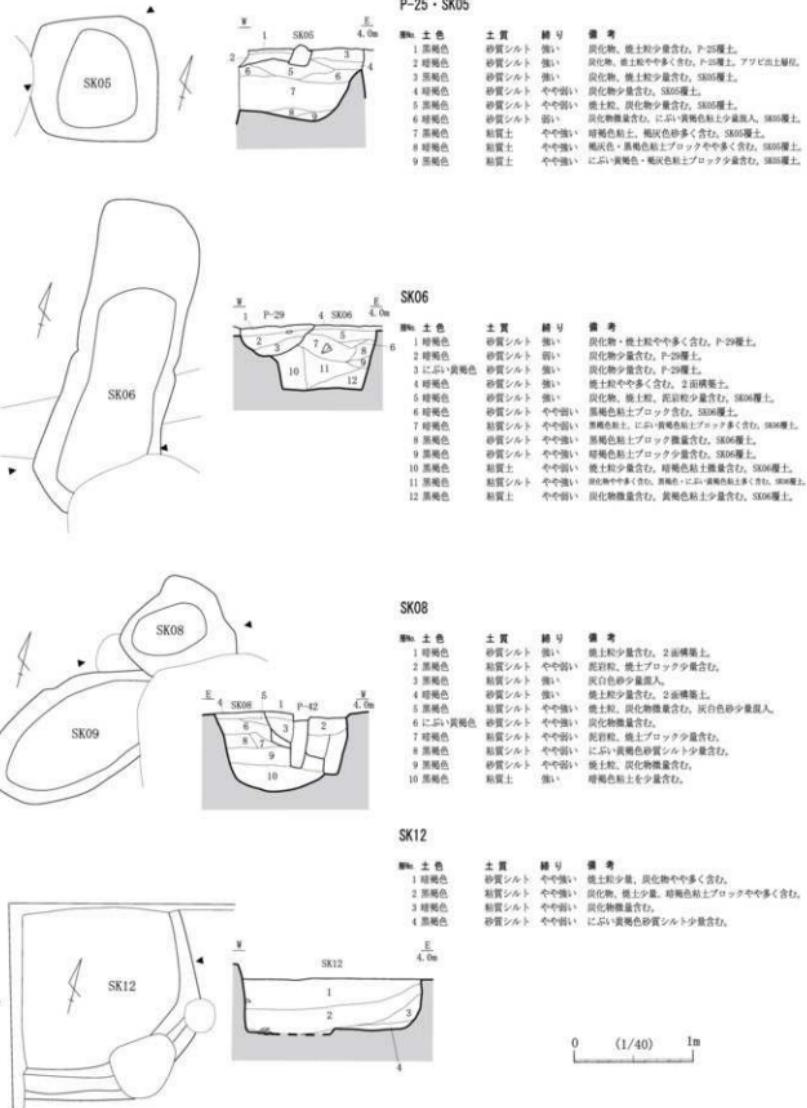
SK13 土坑(第 33・35 図)

調査区中央部東側に位置する。確認面においては P-112 と重複し、これより古い。また遺構の南部は調査区外へ展開するため平面形状・規模は不明である。確認面からの深さは 21cm を測る。堆積土は 2 層に細分でき、全て人為的埋土である。

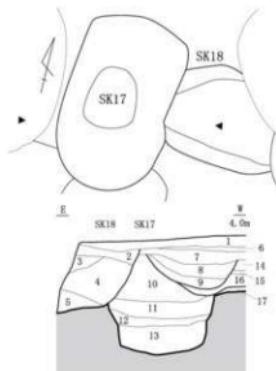
遺物は、志野焼大皿片が出土している。

SK14 土坑(第 30 図)

調査区北西部に位置する。確認面において SK09 土坑と重複関係にあり、これより古い。このため全体の形状・規模は不明である。確認面からの深さは 35cm を測る。堆積土は 2 層に細



第32図 III層上面土坑 1



SK17・SK18

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黒褐色	粘質シルト	やや弱い	凝灰岩粒、鐵土粒少含む。2面構成土。
2 單褐色	砂質シルト	やや強い	にぶい黃褐色シルトや少含む。
3 黒褐色	砂質シルト	弱い	褐褐色少粘土多量含む。
4 黑褐色	粘質シルト	やや弱い	褐褐色少粘土多量含む。
5 黑褐色	砂質シルト	やや弱い	褐褐色少粘土多量含む。
6 鐵灰色	砂質シルト	やや強い	鐵灰岩粒、炭化物少含む。
7 鐵灰色	砂質シルト	やや弱い	鐵灰岩粒、炭化物やや多く含む。3面構成土。
8 鐵灰色	砂質シルト	弱い	炭化物少含む。
9 單褐色	砂質シルト	弱い	炭化物やや少く含む。
10 單褐色	粘質シルト	やや弱い	黑褐色少粘土や多く含む。
11 單褐色	粘質シルト	弱い	黑褐色少粘土、凝灰岩粒微含む。
12 單褐色	砂質シルト	弱い	黑褐色少粘土粒、凝灰岩粒微含む。
13 黑褐色	粘質シルト	弱い	
14 明青灰色	砂質シルト	強い	炭化物微量含む。グライ化。
15 鐵灰色	砂質シルト	やや強い	鐵土粒、炭化物少量含む。
16 黑褐色	砂質シルト	弱い	鐵土粒、炭化物微量含む。
17 單褐色	砂質シルト	やや強い	黑褐色少粘土、炭化物含む。

SK10

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黑褐色	粘質シルト	やや強い	鐵土粒や多く含む。
2 單褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物やや多く含む。
3 黑褐色	粘質シルト	やや強い	炭化物微量含む。
4 黑褐色	砂質シルト	弱い	柱状隙。

P-89

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黑褐色	粘質シルト	やや強い	鐵土粒ロック多量含む。
2 鐵灰色	砂質シルト	やや弱い	炭化物少量含む。
3 にぶい 黃褐色	粘質シルト	弱い	炭化物微量含む。
4 單褐色	粘質シルト	弱い	褐色少量含む。

P-93

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黑褐色	粘質シルト	やや強い	鐵土粒ロック少量含む。
2 黑褐色	粘質シルト	やや弱い	炭化物やや多く含む。

P-94・P-95

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黑褐色	粘質シルト	やや強い	鐵土粒ブロック少量、炭化物やや多く含む。
2 黑褐色	粘質シルト	やや弱い	炭化物やや多く含む。

P-96

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 鐵褐色	粘質シルト	やや強い	鐵土粒、炭化物やや多く含む。
2 黑褐色	砂質シルト	やや弱い	炭化物、凝灰岩粒多量含む。
3 鐵褐色	粘質土	やや強い	炭化物微量含む。
4 鐵褐色	粘質土	やや強い	鐵土粒少量、炭化物微量含む。
5 黑褐色	粘質土	やや強い	炭化物微量含む。
6 黑褐色	砂質シルト	弱い	褐色砂と黒褐色粘土混合層。

SK13・P-112

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黑褐色	粘質シルト	やや弱い	凝灰岩粒、鐵土粒少量含む。2面構成土。
2 鐵灰色	砂質シルト	やや弱い	鐵土粒、炭化物少量含む。
3 單褐色	粘質シルト	やや強い	鐵土粒、炭化物やや多く含む。
4 單褐色	粘質シルト	やや強い	炭化物やや多く、強度少量含む。
5 單褐色	粘質シルト	やや強い	にぶい 黃褐色粘土ブロックやや多く含む。
6 黑褐色	粘質シルト	やや強い	炭化物やや多く含む。黒褐色とにぶい 黃褐色粘土含む。

SD01

■■■ 土 色	土 質	織 紹	備 考
1 黑褐色	粘質シルト	やや弱い	黒褐色粘土やや多く含む。
2 鐵灰色	砂質シルト	やや弱い	炭化物微量含む。
3 單褐色	粘質シルト	やや強い	時間帶粘土、炭化物やや多く含む。
4 單褐色	粘質土	やや強い	黒褐色粘土少量含む。
5 單褐色	粘質シルト	やや弱い	黒褐色粘土少量含む。
6 鐵灰色	砂質シルト	弱い	鐵土粒、炭化物少量含む。3面構成土。

第33図 III層上面土坑・ピット・溝跡

0 (1/40) 1m

分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、かわらけ片が出土している。

SK15 土坑(第 30・35 図)

調査区南西部に位置する。確認面において P-109、SD02 溝跡と重複し、P-109 より古く、SD02 溝跡より新しい。また南側は調査区外へ展開し、東側は向唐門礎石据え方により失うたため、全体の形状・規模については不明である。確認面からの深さは 35cm を測る。堆積土は 3 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、産地不明陶器擂鉢とかわらけ片が出土している。

SK16 土坑(第 30 図)

調査区中央部西側に位置する。確認面において SD01 溝跡、SK17 土坑と重複し、両者より新しい。西側の一部は擾乱により失うが、平面形状は不整円形で短軸 70cm、確認面からの深さは 30cm を測る。断面形状は箱形を呈する。堆積土は 2 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は、かわらけ片が出土している。

SK17 土坑(第 33 図)

調査区中央部南側に位置する。確認面においては SK16・SK18 土坑、SD01 溝跡と重複し、SK16・SK18 土坑より古く、SD01 溝跡より新しい。平面形状は梢円形であり、規模は長軸 142cm、短軸 85cm を測る。確認面からの深さは 73cm であり、断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 4 層に細分でき、下層は自然堆積、上層は人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK18 土坑(第 33 図)

調査区中央部南側に位置する。確認面においては SK17 土坑、P-111 と重複し、P-111 より古く、SK17 土坑より新しい。向唐門礎石据え方により北東部分を失うが、平面形状は梢円形であり、規模は長軸 87cm、短軸 75cm を測る。確認面からの深さは 41cm であり、断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 4 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK19 土坑(第 30 図)

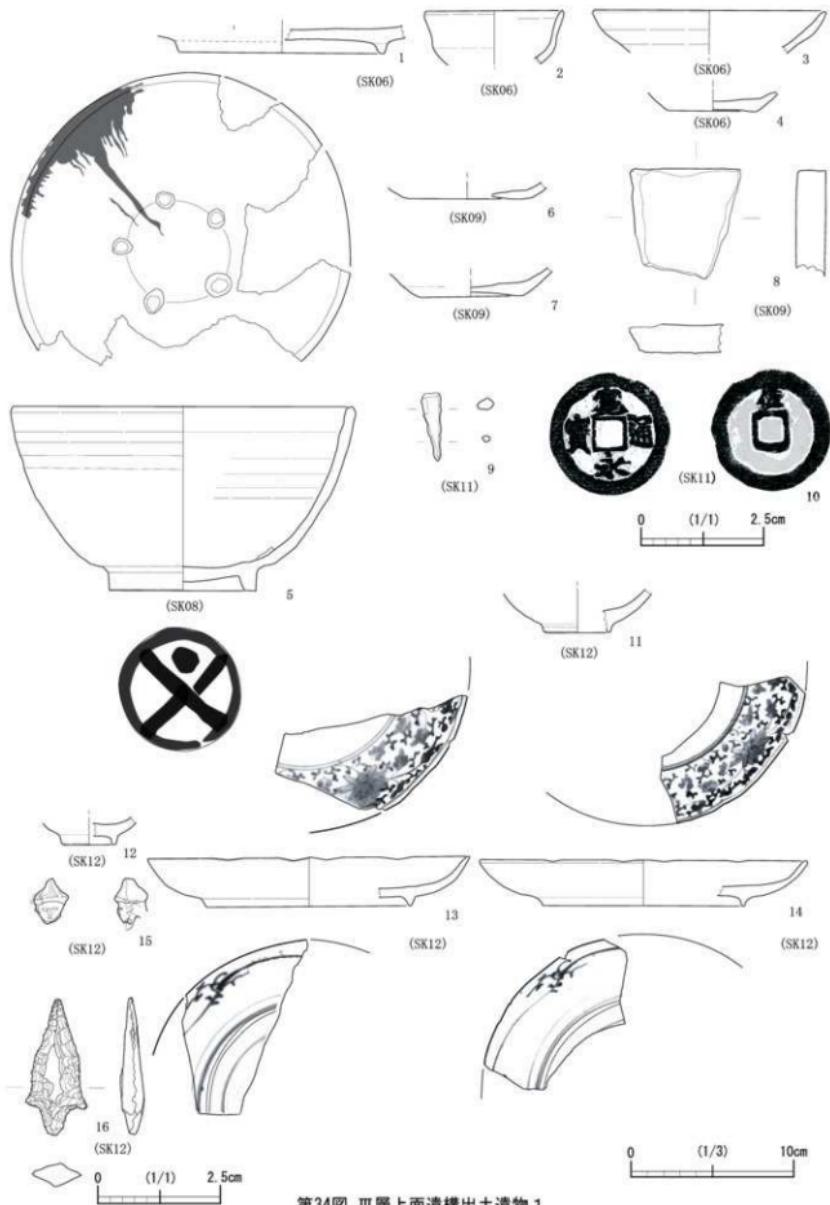
調査区中央南側に位置する。確認面において SD01 溝跡、P-102 と重複し、P-102 より古く、SD01 溝跡より新しい。東側は調査区外へ展開するため、形状・規模については不明である。確認面からの深さは 33cm を測る。断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 5 層に細分でき、下層は自然堆積、上層は人為的埋土である。

遺物は出土していない。

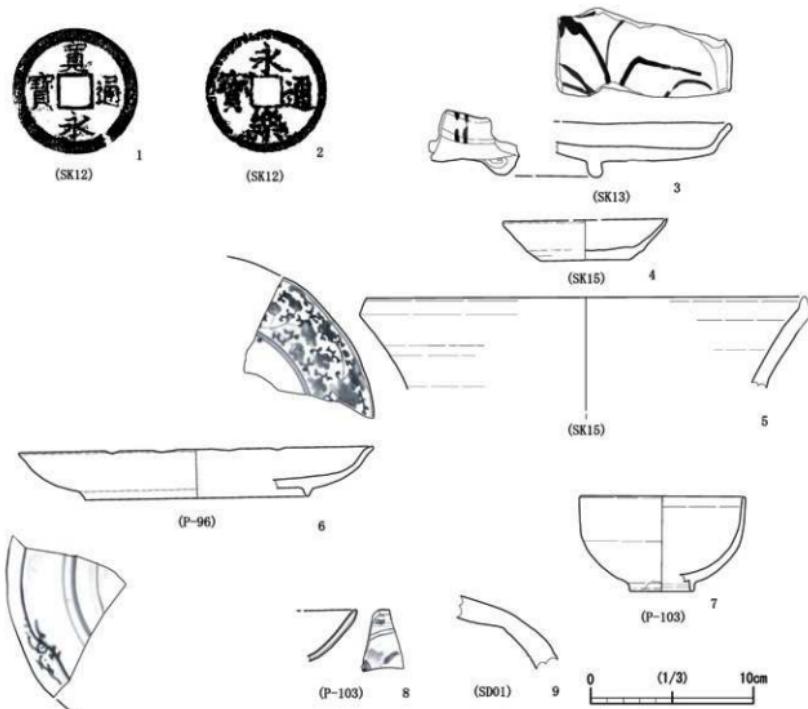
SK20 土坑(第 30 図)

調査区中央北側に位置する。確認面において SK07 土坑、P-107 と重複し、P-107 より古く、SK07 土坑より新しい。東側は向唐門礎石据え方により失い、南側は調査区外へ展開するため、形状・規模については不明である。確認面からの深さは 47cm を測る。断面形状は U 字状を呈する。堆積土は 6 層に細分でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。



第34図 III層上面遺構出土遺物 1



第35図 Ⅲ層上面遺構出土遺物 2

b.溝跡

SD01 溝跡(第 30・33・35 図)

調査区南側で検出した東西方向の溝跡である。約 2.17m を検出したが、西側の向唐門礎石据え方の壁面においても本址の覆土が確認されているため、さらに西側へ延びるものと考えられる。SK16・SK19 土坑と重複し、これよりも古い。

規模は全形が検出されていないため不明であるが、上端幅は 60 cm、深さ 39cm である。断面形状は逆台形を呈すると見られる。主軸方位は 88° 東へ傾く。堆積土は 5 層で、黒褐色と暗褐色粘質シルトの人為的埋土である。

遺物は第 35 図 9 の白石古窯跡群の製品である中世陶器壺の肩部片が 1 点出土している。

SD02 溝跡(第 30・33 図)

調査区南側で検出した南北方向の溝跡である。約 1.6m を検出したが、北側及び南側が調査

区外になり、全容は不明である。SK15 土坑、P-109 などと重複し、これよりも古い。

規模は全形が検出されていないため不明であるが、上端幅は 75 cm、深さ 37cm である。断面形状は逆台形を呈するところとみられる。主軸方位は 5° 西へ傾く。堆積土は 2 層で、暗褐色と黒褐色粘質シルトの人為的埋土である。遺物は出土していない。

c. ピット

III 層上では掘立柱建物跡や柱列として取り扱えない柱穴を 24 口確認した。II 層上面と同様に、これらの中には明瞭に柱痕跡を留めるものも含まれることから、調査区外に存在する掘立柱建物跡などの一部と考えられるが、調査区内での復元は困難であり、一括して報告する。

第3表 III層上面ピット属性表

柱穴番号	長軸	短軸	深さ	覆土	形状	備考
P-88	cm	25cm	16cm	暗褐色シルト	不整形	
P-89	50cm	37cm	26cm	黒褐色シルト	長方形	
P-90	25cm	20cm	cm	黒褐色シルト	隅丸方形	
P-91	25cm	15cm	29cm	に黄褐色シルト	梢円形	
P-92	cm	40cm	29cm	暗褐色シルト	不整形	肥前磁器碗、かわらけ出土
P-93	25cm	25cm	25cm	暗褐色シルト	方形	
P-94	27cm	25cm	19cm	暗褐色シルト	不整形	
P-95	cm	23cm	24cm	暗褐色シルト	不整形	
P-96	55cm	45cm	35cm	暗褐色シルト	梢円形	肥前磁器皿、かわらけ出土
P-97	35cm	30cm	19cm	暗褐色シルト	方形	かわらけ出土
P-98	36cm	30cm	35cm	黒褐色シルト	長方形	
P-99	55cm	45cm	26cm	暗褐色シルト	不整形	
P-100	20cm	20cm	24cm	に黄褐色シルト	円形	
P-101	25cm	22cm	13cm	黒褐色シルト	長方形	
P-102	50cm	40cm	42cm	暗褐色シルト	方形	
P-103	cm	cm	18cm	黒褐色シルト	不整形	大堀相馬碗、貿易磁器皿出土
P-104	cm	33cm	34cm	暗褐色シルト	不整形	
P-105	cm	33cm	46cm	暗褐色シルト	不整形	
P-106	cm	cm	31cm	黒褐色シルト	不整形	
P-107	65cm	45cm	5cm	暗褐色シルト	長円形	
P-108	55cm	42cm	39cm	暗褐色シルト	不整形	
P-109	40cm	37cm	55cm	暗褐色シルト	円形	
P-111	cm	67cm	21cm	暗褐色シルト	不整形	
P-112	cm	cm	23cm	黒褐色シルト	不整形	

第VI章 考察

本調査では、向唐門礎石据え方からはじまり、掘立柱建物跡、柱列跡、通路状遺構、溝跡、土坑などの遺構を検出した。その一方で各遺構から出土した遺物は瓦を除くと少量に留まっている。以下では出土遺物と遺構について検討し、各遺構期の概要についてまとめておくこととする。

1. 遺物について

今回の調査では、整理箱4箱ほどの遺物が出土している。出土遺物の内訳は、瓦、国内産陶磁器、瓦質土器、土師質土器、土製品、石製品、金属製品、貿易陶磁、中世陶器、須恵器、石器、木製品、自然遺物であるが、全体の98%は近世遺物で占められている。

原始・古代遺物としては石鏃、須恵器甕片が出土している。石鏃は有茎石鏃であり、石材は頁岩である。今回の調査では他に縄文土器などの遺物は出土していないため、遺構を埋め立てる際に他所から土砂を持ち込んだ時に混入したと思われる。須恵器甕片は内面には同心円状の当具痕、外面には叩き目を有する。調査地点の西側に存在する低位丘陵斜面には二木横穴墓群が展開していることから、調査地点周辺にも古墳時代後期の集落跡が存在する可能性もあるが、今回の調査地点では確認できていない。

中世遺物は貿易陶磁、瓷器系陶器が出土している。貿易陶磁は2点出土し、第11図8は青磁碗底部片であり、胎土及び釉調から龍泉窯系の製品と推定され、14世紀代の年代観が考えられる。また第35図8は明代末の漳州窯系の製品と推定され、16世紀代の年代観が考えられる。瓷器系陶器はいずれも白石市に展開する古窯跡群の製品であり、在地の中世瓷器系陶器の生産時期を考慮すると13世紀半ばから14世紀前半頃の年代観が考えられる。

近世遺物は大別すると磁器、陶器、土器、瓦質土器、瓦、金属製品、石製品が出土している。磁器は大半が染付であり、生産地は肥前と瀬戸・美濃、そして産地不明で構成される。このうちすべての時期で肥前系磁器が大勢を占めている。器種構成を見ると皿が最も多く、碗は少ない傾向となっている。

陶器の生産地は大堀相馬、小野相馬、瀬戸・美濃、肥前、岸窯、信楽の他に、在地産と考えられる産地不明陶器がある。このうち大堀相馬が最も多く、次いで小野相馬が多い傾向を示す。出土器種は碗・皿が主体を占めるが、鉢(擂鉢を除く)では小野相馬が最も多い。

土器は土師質土器、いわゆる「かわらけ」でのみ占められる。いずれも輪転成形であり、手捏ね成形のものは皆無である。口径・底径から大別すると大小の2種に分類できる。また口縁部内外等に煤が付着しているものも散見できる。

瓦質土器は香炉、五徳、焜炉の3者に限定される。しかしながらいずれも小片のため全体像は不明である。

瓦は平瓦と丸瓦、そして1点のみであるが軒丸瓦が出土している。瓦の多くは向唐門礎石据え方からの出土であるが、I層中、II層上面の遺構などでも多く認められることから江戸期を

通じて境内に何らかの瓦葺の施設の存在が推量される。

土製品としては土鈴と土人形が出土しているが、土鈴の出土は市内では鶴ヶ崎城跡に次いで2例目となった。また第34図15の土人形は、頭部の形状が円錐状を呈するという特異なものである。このような事例は染付の図柄として唐人を表現される際に用いられており、現時点では唐人を模った土人形であると考えたい。

石製品は砥石のほか石塔の笠部と考えられるものが出土している。砥石の種類は全て仕上砥であり、石材は凝灰岩と粘板岩の2者を選択している。使用面は2面を使用している。

金属製品は古銭、釘、煙管が出土している。古銭は第35図1の永楽通寶を除くと全てが新寛永通寶である。この大半は銅銭であるが第7図20は鉄銭であり、背面に波状文がみられる。なお第34図10では背面に「佐」字が認められる。煙管は第27図13のP-87から吸口が1点出土している。これは古泉氏の編年（古泉1987）のIII・IV段階に位置付けられ、概ね18世紀代の年代観が与えられる。

このほか木製品としては遺存状態が極めて劣悪であり、取り上げることはできなかつたが、漆器碗が1層掘下げ時に1点出土している。現地での観察では外面には黒漆を施し、笠を象った文様が螺鈿のような材質で表現され、内面は朱漆を施していた。

2. 出土遺物から見る特色

本調査で出土した遺物を見た場合、前述のとおり瓦の出土量が多いことがまず目に付く。竹駒神社には境内古絵図は残っておらず、江戸期においてどのような施設が境内に配置されていたのか不明なところが多いが、今回の調査によって出土した瓦の出土量を勘案すれば、瓦を用いた何らかの施設が境内に存在していた可能性は高いものと思われる。ただし今回の調査では軒丸瓦は1点のみで軒平瓦の出土は無いため、建物の屋根全面に瓦葺を施すというよりは、小規模な建物や廻などの区画施設の一部に瓦を用いたものと現時点では考えている。

また市内の近世遺跡と比較した場合、今回の調査ではかわらけの出土量が多いという点も注目される。市内近世遺跡ではこれまで鶴ヶ崎城跡、下野郷館跡でかわらけが出土しているが、本調査地点では狭い面積でありながらも上記の遺跡からの出土数を凌駕しており、一部灯明皿としての使用例もあるものの、この出土量の背景としてはかわらけの用途の一側面を担う「清淨な器」としての性格が、神社境内で行われる神事と密接に繋がった結果であると考えられる。

陶磁器類としては第34図1、第35図1のような一般集落では通常見られない器種も見られながらも、一方では拝殿の眼前の地点でありながら大堀相馬焼の碗・皿類、小野相馬焼の碗・鉢類、そして在地産と考えられる播鉢など日常雑器も出土している。II層上では小規模な掘立柱建物跡も確認されており、江戸期における社寺境内の空間利用のあり方は現在の認識とは若干異なっていた可能性が推量できる事例として留意する必要性があろう。

3. 遺構について

本地点では大別して3時期の遺構が存在していることが確認されたが、中でも宝永7年

(1710) に伊達吉村によって本殿が修造された際に行われたと考えられる整地面（II層）では旧参道跡をはじめとして多くの遺構が確認された。またこのII層の下には暗褐色土層（III層）を掘り込む遺構が存在することが確認され、これまで文献資料及び伝承等でのみで語られてきた竹駒神社において、初めて考古資料からも若干の裏付けを補足することができたことは大きな成果であると言える。以下に今回の調査で確認された遺構の中でも特徴的な性格を有する遺構について若干の考察を行う。

【SX02 旧参道跡とその周辺について】(第36図)

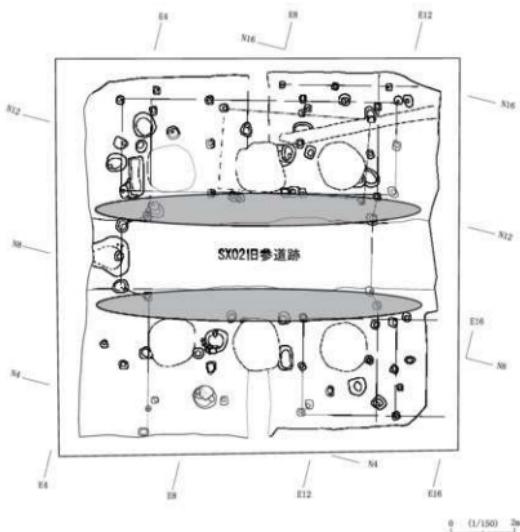
II層上で確認された旧参道跡（SX02）は、幅は2.2mほどであり、調査区の東西にわたって確認された。SX02は石疊や玉砂利などで覆われていた痕跡は皆無であり、また周辺の整地面と基本的な土質は変わらないが、この上面と周辺の土色は確認時には明瞭な違いを見せていた。しかしながら縫りの点ではSX02では縫りが弱いことに対し、その南北沿いの整地面では縫りが極めて強いという大きな相違が認められる。このような状況については本来参道という場所は「神の通る道」という認識から境内の中でも神聖視される場所であり、参詣者は参道中央を歩まないとしており、今回確認できたSX02の南北に沿っては、同じII層を構成する土質としても特に固く縛まっていたことは、前述の神社内における一つの信仰形態のあり方の裏付けになる可能性を秘めているものと考えられる。

また、旧参道跡に面してはSA01・SA02柱列跡という施設が伴うことが確認された。この両者の性格は参道を挟んで同様の柱列を展開することから、神社境内の中でも特に神聖な場所である本殿が存在する区域とその他を明確に示すための板塀などの区画施設であると考えられる。ただし、この両者はわずか7m離れているに過ぎないため、両者が並存していた可能性は低いものと考えられるが、年代判定の指標となる遺物の出土、及び重複関係も無いため詳細な変遷については不明である。

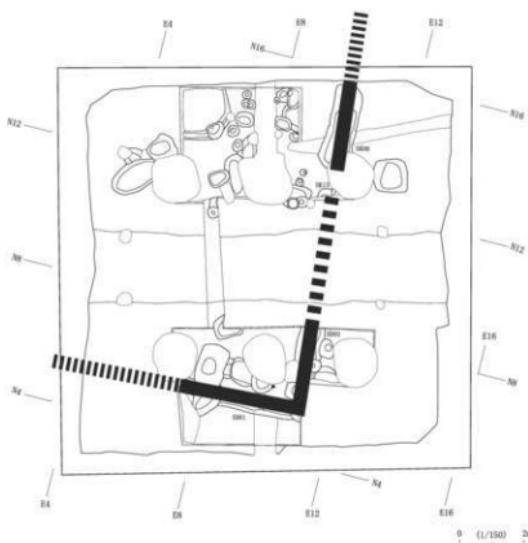
掘立柱建物跡は3棟確認されているが、SB01、SB02は調査地点内の基軸となるSX02と同様の主軸を呈しているのに対し、SB03は大きく異なっている。SB03はII層上面での重複関係においても古い段階に位置付けられることから、II層形成後間もない時期の所産であると考えたい。なお、いずれの掘立柱建物跡も柱材はほぼ3寸ほどの円柱であり、建物としては簡易的な部類に属することから、恒常的な施設としては考えにくく、例えば縁日などの際の仮小屋的な性格であると推定される。

【神事関連遺構について】

神事関連遺構としては、SX01とSX03不明遺構が上げられる。SX01は調査区西部に位置し、旧参道跡と考えられるSX02の中央に存在している。この遺構の覆土は大量の焼土ブロックと少量の炭化物を含み、また底面には杭を刺したような痕跡が2箇所認められている。壁面も若干焼けているが、恒常的に本址で燃焼を行ったとは考えにくい。拝殿の眼前でもあり、さらには参道中央での検出であることから、性格は不明ながらも短発的な何らかの祭祀を執り行った可能性も考慮される。II層上北東部で確認されたSX03からはアワビ7点が出土したほか、その下部及び周辺からは先端が針状を呈する、おそらくマツと考えられる植物遺存体が散見でき



第37図 II層上面の硬化範囲略図



第38図 III層上面のL字状溝跡

た。アワビの遺存状態は劣悪であったものの、全てが正位の状態であったこと、そしてマツはこのアワビの下にあることから、本来はマツ葉の上にアワビを載せた状態で埋めたものと想定できる。

現在の竹駒神社では今回確認された SX01、SX03 のような神事は執り行っていないとのことだが、管見に触れた限りではマツ葉とアワビ貝が共伴する事例は見出せないものの、アワビ貝を祭祀的に用いる事例は鎌倉や伊豆山でも認められていることから、SX03 については地鎮をはじめとした何らかの神事に関わる遺構、もしくは神事を執り行つたあとでの廃棄遺構と考えられる。今後の類例増加を待ちたい。

【Ⅲ層上面で確認された溝跡について】(第 37 図)

Ⅲ層上では土坑やピットを確認したほかに溝跡が 2 条検出されている。この SD01・SD02 溝跡は SD01 が東西方向、SD02 が南北方向に主軸を有し、南東部で直角に交わり L 字状を呈する。これらの溝跡は重複関係においても本地点での最古の遺構と位置付けられ、SD01 から第 35 図 9 の白石古窯跡群の製品である中世瓷器系陶器発片が出土したことから、現時点では 13 世紀後半～14 世紀前半頃の遺構であると考えている。

これらの溝跡は、現在見られる参道の前身であるⅡ層上で確認した旧参道跡である SX02 の直下を横切ることがトレンチ調査によって確認されていることから、近世以前の参道は現在まで踏襲される道筋とは若干異なっていることが判明した。また調査区中央北側で確認されている SK06 は、狭い面積での確認のため現時点では土坑と判断しているが、底面海拔や主軸方位が SD02 と近似しており、同様に境内域を区画した遺構である可能性が考慮される。ところが SD02 北端の可能性がある P-112 と SK06 は連続せず、僅かに幅約 0.7m ほどの土橋状に掘り残されている。両者が同一時期の所産であると考えれば、この部分に何らかの出入口等の施設が存在していた可能性も考慮できるが、今回は狭い面積での調査であり明らかにはできなかつた。

4. 各層位の年代について

I 層については、層中に 18 世紀代から 19 世紀前半頃の遺物を含み、向唐門の礎石据え方は I 層上面から掘り込まれていることから、天保十三年(1842)の向唐門の創建に際して盛土・整地を行つたものと考えられる。

II 層については、上面に展開する遺構では 17 世紀代から 19 世紀前半までの遺物を含んでいるが、中心となるのは 18 世紀前半から 19 世紀前半の時期のものである。また II 層中からは 17～18 世紀前半を中心とした時期の遺物が出土している。竹駒神社における本殿付近での土木史を見ると、宝永七年(1710)に仙台藩五代藩主である伊達吉村の寄進によって本殿の大改修が行われており、遺物の年代観とも矛盾しないことから II 層とした整地の契機はこの本殿大改修と同時に行われた可能性が高い。

III 層については、出土した遺物では 13 世紀後半～14 世紀前半の年代観が考えられる中世瓷器系陶器の出土があるものの、概ね 16 世紀末頃～18 世紀前半である。この同一面上での時代を異にした遺構のあり方は、II 層を造作する際に削平などが行われた結果であると考えられる。

第V章　まとめ

- ・出土した遺物は縄文時代～近世まであるが、主体を為すのは18世紀以降である。
- ・向唐門の地下構造調査では、地下1.7mまで根石を詰め込んで総重量40～50tの建物が沈下しないようにするための地下構造が明らかとなった。
- ・向唐門礎石据え方等からは瓦片が多く出土したことから、周知の古絵図には描かれてはいないが境内に瓦を葺いた施設が存在した可能性が考えられる。
- ・向唐門を作るにあたり、20cmほどの盛土（I層）を行ったことを確認した。
- ・向唐門を作る際の盛土の下には、暗褐色土を用いた整地面（II層）が存在していることが明らかとなった。この整地は出土遺物と整地の規模から宝永7年（1710）に伊達吉村によって本殿が修造された際に行われたと考えられる。
- ・II層上では旧参道（SX02）、掘立柱建物跡（SB01～03）、柱列跡（SA01～03）、土坑などを確認した。
- ・掘立柱建物跡の柱穴及び柱痕跡はいずれも小さいものであり、建物の性格としては恒常的な施設ではなく、仮小屋的な施設であると考えられる。
- ・SX02 旧参道跡の幅は2.2mほどであり、その表面は硬化しておらず、むしろ旧参道脇の南北の整地面がより硬化していた。
- ・SX03 不明遺構からはアワビ貝7個と葉先が針状となる針葉樹の葉が出土した。アワビ貝はいずれも正位で5個体が重なるものと1個ずつのがあり、マツと考えられる針葉樹の葉はこれらの下から出土していることから、アワビ貝の下に敷いて埋設した可能性が考えられる。遺構の性格としては神事関連遺構である可能性が高いと考えられる。
- ・II層の下には暗褐色粘質シルト層（III層）がある。このIII層上では中世から近世前期の遺構や遺物が確認されている。中でも中世瓷器系陶器焼片が出土したSD01溝跡は、SD02溝跡と直角に交わることが予想される。このSD02溝跡はII層上の旧参道の下を通過していくことから、江戸時代以前の参道及び本殿は現在地とは若干異なる場所にあったことも想定できる。
- ・出土した遺物は日常雑器的な性格を有するものも多く認められ、またII層上では小規模な掘立柱建物跡も存在するなど、現在の境内空間の利用のあり方と江戸期では異なっていることが確認された。
- ・竹駒神社ではこれまで小野墓によって勧請された伝承や、奉納物の伝承のほかには江戸時代の棟札、古文書等の資料によってのみ語られてきたが、今回は初めて考古学的な手法によって中世以降の境内変遷について一端を明らかにすることができた。

引用・参考文献

- 井浅隆夫 1992 「器形分類表と分類基準」『東京都新宿区内藤町道路一放矢5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－第II分冊（遺物編）』 新宿区内藤町道路調査会
- 伊藤正義他 1990 「東北の陶磁史」 福島県立博物館
- 岩沼市 1984 「岩沼市史」 岩沼市市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 「岩沼市土地分類調査（郷部調査）報告書・現況調査編」
- 大橋康二 2001 「肥前陶磁の流通（東日本）」『国内出土の肥前陶磁・東日本の流通をさぐる』 九州近世陶磁学会
- 小川望 2001 「Ⅶ、江戸の遺物 3. 土器 厨房具1 煙炉」『江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会
- 川又隆央 2004a 「鶴ヶ崎城跡・第2地点」 岩沼市文化財調査報告書第3集
- 川又隆央 2004b 「鶴ヶ崎城跡・第3地点」 岩沼市文化財調査報告書第4集
- 川又隆央 2005a 「長徳寺前遺跡」 岩沼市文化財調査報告書第5集
- 川又隆央 2005b 「鶴ヶ崎城跡・第4地点」 岩沼市文化財調査報告書第6集
- 川又隆央 2005c 「重塗研究の方法」『遺跡研究の方法』東北中世考古学会第12回大会資料集
- 川又隆央 2005d 「宮城県の礎石経塚」『宮城考古学』第7号 宮城県考古学会
- 川又隆央 2007 「朝日古墳群」 岩沼市文化財調査報告書第7集
- 川又隆央・熊谷篤 2009 「岩沼市中ノ原遺跡所在の板碑と出土資料について」『宮城考古学』第11号 宮城県考古学会
- 川又隆央・小泉博明 2004 「下野郷館跡」 岩沼市文化財調査報告書第2集
- 菊地逸夫 2003 「陸奥の陶器生産・一本杉窯跡群」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の百年」 九州近世陶磁学会10周年記念号学会編
- 古泉弘 1987 「江戸の考古学（考古学ライブラリー48）」 ニューサイエンス社
- 小村田達也他 1993 「北原遺跡」 宮城県文化財調査報告書第159集
- 佐藤洋 2003 「陸奥のかわらけ・陸奥南部2・宮城県」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 間根達人 1998a 「仙台城における陶磁器の変遷」『東北大學埋蔵文化財調査年報9』 東北大學埋蔵文化財調査研究センター
- 間根達人 1998b 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大學埋蔵文化財調査年報10』 東北大學埋蔵文化財調査研究センター
- 間根達人 2006 「流通①北海道・東北」『江戸時代のやきもの一生産と流通』 財団法人瀬戸市文化振興財団
- 竹駒神社 1993 『竹駒神社』資料篇
- 東北歴史博物館 2005 「特別展古代の旅～人とものの通るみち～展示図録」
- 藤沢良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第10輯』 （財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- 文化財建造物保存技術協会 2001 『重要文化財江川家住宅東藏他十二棟保存修理報告書』 江川文庫
- 堀江格 2003 「陸奥の施釉陶器生産・岸窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 森田勉他 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集・4集』 九州歴史資料館

- 八重輕忠郎 2001 「東北における中世初期陶磁器の分布」『都市・平泉－成立とその構成－』 日本考古学
協会 2001 年度盛岡大会研究発表資料集
- 八重輕忠郎 2003 「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 吉井宏他 2002 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第1次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2003 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第2次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2004 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第3次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2005 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第4次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2006 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第5次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2007 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第6次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2008 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第7次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 渡辺清子 2000 「引込横穴墓群発掘調査報告書」 岩沼市文化財調査報告書第1集

第4表 遺物観察表

上層面向唐門礎石側方出土遺物1 (第7回)

*は既存値

No.	遺物No.	種別	器種	測量				産地	時期	編調		備考	団版番号	登録No.
				口径	底径	高さ	重量			内	外			
1	磚石側方1	瓦	瓦	14.8	8.3	3.15	70	肥前	18世紀代	透明釉	透明釉	くらわんか手。	7-4	128
2	磚石側方1	施釉陶器	瓶	13.2	6.6	3.2	169	大分県馬	19世紀前半	灰釉	灰釉	焼物による模擬山水文。	7-10	123
3	磚石側方1	施釉陶器	瓶	5.9	1.85	24	小野町馬			灰釉	灰釉	削り出し窓口。	8-16	109
4	磚石側方1	施釉陶器	瓶	4.2	1.2	15	大分県馬	18世紀後半~19世紀	灰釉	灰釉	削り出し窓口。	8-17	136	
5	磚石側方1	施釉陶器	瓶?							不明	灰釉	焼物による模擬付け。	8-13	130
6	磚石側方1	青磁陶器	盃鉢	21.0	17.0	3.7	22	在地					9-15	114
7	磚石側方1	施釉陶器	盤鉢	15.8	4.95	207	鹿津?			灰釉	灰釉		8-19	145
8	磚石側方1	土器	小口平付	15.2	8.0	2.7	12	在地				深少量付着	8-41	96
9	磚石側方1	土器	小口平付	11.4	5.5	1.9	6	在地				印刷模、内外面黒色、口縁部に窓口付。	8-40	93
10	磚石側方1	土器	小口平付	8.5	4.1	0.5	53	在地				印刷模切、内外面灰白色。	8-23	69
11	磚石側方1	土器	小口平付	8.4	4.1	1.1	11	在地				印刷模切、内外面灰白色。	7-4	74
12	磚石側方1	土器	小口平付	8.0	4.1	2.0	25	在地				印刷模切、内外面黑色。	8-32	85
13	磚石側方1	土器	小口平付	6.4	3.1	1.4	14	在地				印刷模切、内外面黑色。	8-20	79
14	磚石側方1	土器	小口平付	7.8	3.0	0.9	19	在地				印刷模切、内底面に墨少量付着。	8-33	87
15	磚石側方1	土器	小口平付	4.8	1.9	1.0	10	在地				印刷模切。	8-36	82
16	磚石側方1	土器	小口平付	3.2	0.8	2	9	在地				印刷模切。	8-35	81
17	磚石側方1	土器	小口平付	3.2	0.8	2	9	在地				印刷模切。	9-4	132
18	磚石側方1	瓦質土器	碗鉢?			3.0	28	在地				鉢型模、背板残。	9-13	140
19	磚石側方1	土器	小口			1.8	2	在地				安山岩、質謹?	9-7	158
20	磚石側方1	古鉢	瓦質土器	2.8	0.1	6								68
21	磚石側方1	石器	石臼残?	+16.0	+10.3	420								

上層面向唐門礎石側方出土遺物2 (第8回)

*は既存値

No.	遺物No.	種別	器種	測量				産地	時期	編調		備考	団版番号	登録No.
				口径	底径	高さ	重量			内	外			
1	磚石側方2	瓦	瓦	+1.6	+1.7	+1.8	2.6	699	在地	内面に布目模。			6-1	31
2	磚石側方2	瓦	瓦	+6.3	+5.0	+2.1	102	在地		内面に布目模。			6-6	43
3	磚石側方2	瓦	瓦	+19.2	+8.6	+1.9	418	在地		内面に布目模。			6-2	34
4	磚石側方2	瓦	瓦	+7.2	+5.3	+3.2	92	在地		内面に布目模。			28	
5	磚石側方2	瓦	瓦	+7.0	+6.2	+1.3	74	在地		内面に布目模。			40	
6	磚石側方2	瓦	瓦	+6.6	+6.2	+2.6	85	在地		内面に布目模。			27	

上層面向唐門礎石側方出土遺物3 (第9回)

*は既存値

No.	遺物No.	種別	器種	測量				産地	時期	編調		備考	団版番号	登録No.
				口径	底径	高さ	重量			内	外			
1	磚石側方2	瓦	瓦	+11.0	+10.4	+2.4	213	在地		内面に布目模。			6-3	44
2	磚石側方2	瓦	瓦	+7.1	+10.0	+1.9	161	在地		内面に布目模。			36	
3	磚石側方2	瓦	瓦	+8.7	+5.9	+2.0	128	在地		内面に布目模。			41	
4	磚石側方2	瓦	瓦	+7.9	+5.7	+2.1	171	在地		内面に布目模。			33	
5	磚石側方2	瓦	瓦	+5.1	+5.6	+2.2	70	在地		内面に布目模。			39	
6	磚石側方2	瓦	瓦	+7.5	+7.2	+2.1	174	在地		内面に布目模。			35	
7	磚石側方2	瓦	瓦	+20.0	+16.3	+4.2	858	在地		内面に布目模。			6-8	32

上層面向唐門礎石側方出土遺物4 (第10回)

*は既存値

No.	遺物No.	種別	器種	測量				産地	時期	編調		備考	団版番号	登録No.
				口径	底径	高さ	重量			内	外			
1	磚石側方2	瓦	瓦	+13.0	+8.4	1.9	247	在地					12	
2	磚石側方2	瓦	瓦	+14.0	+8.3	1.9	197	在地					6-14	3
3	磚石側方2	瓦	瓦	+10.2	+7.7	1.6	199	在地					10	
4	磚石側方2	瓦	瓦	+10.1	+10.3	1.6	192	在地					14	
5	磚石側方2	瓦	瓦	+7.6	+8.4	1.6	144	在地					13	
6	磚石側方2	瓦	瓦	+9.8	+5.0	2.1	104	在地					15	
7	磚石側方2	瓦	瓦	+6.0	+8.4	1.6	90	在地					6-15	9
8	磚石側方2	瓦	瓦	+7.0	+7.2	1.5	70	在地					6-10	6
9	磚石側方2	瓦	瓦	+5.0	+7.1	1.6	57	在地					16	
10	磚石側方2	瓦	瓦	+6.7	+7.8	1.8	85	在地					6-16	11
11	磚石側方2	瓦	瓦	+5.4	+7.7	2.1	96	在地					17	
12	磚石側方2	瓦	瓦	+11.3	+12.9	3.0	326	在地					6-13	18

巨層上面櫛立柱建物跡・柱跡出土遺物 (第24回)

*は既存値

No.	遺物No.	種別	器種	測量				産地	時期	編調		備考	団版番号	登録No.
				口径	底径	高さ	重量			内	外			
1	S.A.O.1	施釉陶器	小甌	8.2	3.6	11	94	17C.前?	19C.	透明釉	透明釉	白磁	8-8	106
2	S.A.O.2	施釉陶器	小口平付	6.4	3.6	1.8	15	在地		17世紀代以前	灰釉	灰釉	8-21	99
3	S.B.O.1	瓦	平瓦	+5.5	+3.8	+1.7	30	在地					22	
4	S.A.O.3	瓦	平瓦	+8.7	+5.1	+1.5	74	在地					147	
5	S.K.O.2	織機脚	織機脚鉗	6.0	2.5	1.2	12	在地					75	
6	S.K.O.2	織機脚	平瓦	+7.7	+5.0	+1.6	71	在地					29	
7	S.K.O.2	織機脚	瓦	+5.5	+2.5	+1.0	16	在地					147	
8	S.X.O.1	土器	小口平付	6.4	1.3	14	在地						75	
9	S.X.O.2	古鉢	瓦質油質	2.4	0.1	6							151	

巨層上面構造出土遺物 (第27回)

*は既存値

No.	遺物No.	種別	器種	測量				産地	時期	編調		備考	団版番号	登録No.
				口径	底径	高さ	重量			内	外			
1	S.K.O.2	織機脚	織機脚鉗	6.0	2.5	1.2	12	在地					133	
2	S.K.O.2	織機脚	瓦	+5.5	+2.5	+1.0	16	在地					109	

1	S X 0 2	施釉陶器	罐体	27.4	4.4	70		铁轴	铁轴	做成不良。	8-17	113	
6	P - 7	施釉陶器	大型钵	27.2	6.1	50	小野田窑	13C末~14C初	灰釉	灰釉		8-2	137
5	P - 7	施釉陶器	大型钵	15.2	9.4	200	小野田窑	13C末~14C初	灰釉	灰釉	内面脱色的白釉化。	8-1	137
9	P - 1.6	古铁	丸条通寶	2.3	0.1	6					带盖		132
10	P - 8.7	古铁	丸条通寶	2.3	0.1	6					带盖		133
11	P - 54	施釉陶器	罐底钵	11.6	1.5	2	大屋相馬?	13C末~14C初	铁轴	铁轴	铁轴手法。	8-6	102
12	P - 7.0	施釉陶器	罐底钵	11.6	1.5	2	大屋相馬	13C末~14C初	铁轴	铁轴	内外底黄褐色。	104	
13	P - 8.7	金属製品	佛掌淨口	8.4	3.0	7						9-10	84

Ⅲ系上面構出上遺物1 (第34回)

+12推存値

No.	遺物No.	種別	器種	重量			產地	時期	施調		備考	回収番号	登録No.	
				11件	直径	高さ			内	外				
1	S K 0.6	施釉陶器	大型	12.6	<1.7	96	志野	16C末	長石釉	長石釉	盛り付ける台、高台内の施調。	7-12	119	
2	S K 0.6	施釉陶器	瓶	8.6	<3.1	108	大屋相馬		細白釉	細白釉		8-4	99	
3	S K 0.6	土器	小砂輪け	14.4	<2.0	22	在地						9-38	91
4	S K 0.6	土器	小砂輪け	5.4	<1.2	16	在地		細白釉切	細白釉切		8-26	72	
5	S K 0.8	施釉陶器	片口鉢	21.2	9.0	11.4	T15 小野田窑	10世紀代~11世紀	灰釉、斑縞	灰釉、斑縞	削り出し、焼成、高台内の施調。	7-11	125	
6	S K 0.9	土器	小砂輪け	7.2	<1.0	10	在地		細白釉切	細白釉切		8-31	80	
7	S K 0.9	土器	小砂輪け	6.2	<1.7	35	在地		細白釉切	細白釉切		8-25	79	
8	S K 0.9	土器	平鉢	6.7	<0.7	39	在地					6-12	4	
9	S K 1.1	金属製品	釦	4.2	1.2	0.7							82	
10	S K 1.1	古鐵	丸条通寶	2.8	0.1	3					背面に「f6」字			
11	S K 1.2	施釉陶器	瓶	3.8	2.65	30	小野田窑?		粗釉	粗釉			121	
12	S K 1.2	施釉陶器	小鉢	3.4	1.7	9							134	
13	S K 1.2	施釉陶器	瓶	19.9	12.6	3.0	63	堺山	13C~14C	透明釉	透明釉	外房草文、内花房草文	7-3	126
14	S K 0.1	施釉陶器	輪花瓶	20.2	10.2	5.8	64	堺山	13C~14C	透明釉	透明釉	外房草文、内花房草文	7-1	124
15	S K 1.2	土器	人形	>2.8	<2.15	>2.0	7	在地				陶人像	9-12	129
16	S K 1.2	土器	石鍋	2.8	1.2	0.5	1				白羽彌		9-16	137

Ⅲ系上面構出上遺物2 (第35回)

+12推存値

No.	遺物No.	種別	器種	重量			產地	時期	施調		備考	回収番号	登録No.	
				11件	直径	高さ			内	外				
1	S K 1.2	古鐵	水滴油器	2.4	0.1	2	中国							135
2	S K 1.2	古鐵	丸条通寶	2.6	0.1	4								136
3	S K 1.3	施釉陶器	瓶	3.36	76	美濃		17C代	長石釉	長石釉	村口高台(村口星)。	7-13	144	
4	S K 1.5	土器	小砂輪け	10.2	5.4	2.45	在地		粗釉	粗釉	粗釉系切。	8-37	84	
5	S K 1.5	施釉陶器	瓶底	27.6	5.6	31	岸		灰釉	灰釉		8-18	108	
6	P - 9.6	磁器	輪花瓶	21.8	13.8	3.6	45	東南	17C~18C	透明釉	透明釉	外房草文、内花房草文	7-2	127
7	P - 1.0.3	施釉陶器	瓶	10.2	3.8	5.8	123	大屋相馬	18C	灰釉	灰釉	高台削り出し。	7-8	97
8	P - 1.0.3	施釉陶器	瓶	4.0	5			清初	透明釉	透明釉			7-7	129
9	S D 0.1	施釉陶器	瓶		<1.5	79	在地	13C後~14C初			白石古窯跡群		9-19	150

I 層構築出土遺物(第11図)

*は現存種

No.	種別	器種	法量			産地	時期	軸調		備考	国版番号	登録番号	
			口径	底径	器高			内	外				
1	施釉陶	瓶	9.8	—	4.3	34	肥前	18C	透明釉	透明釉	吉文	7-6	126
2	施釉陶	瓶	14.8	—	3.3	5	大瀬町	18C 滝平～19C	灰釉	灰釉	吉文	8-7	100
3	施釉陶	瓶	—	—	3.8	5	大瀬町	18C	灰釉	灰釉	吉文	8-11	112
4	施釉陶	罐	6.2	—	2.3	12	大瀬町	18C	灰釉	灰釉	吉文	8-10	113
5	瓦上器	瓦片	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9-7	143
6	施釉陶	壺	6.4	—	2.8	128	在地	不明	—	—	内外面黑色。	9-11	114
7	施釉陶	壺	—	—	1.4	2	在地	不明	灰釉	灰釉	吉文	9-11	116
8	施釉陶	壺	—	—	7.6	1.7	大瀬町	18C	灰釉	灰釉	吉文	9-13	111
9	施釉陶	壺	—	—	4.3	1.5	14	在地	青磁釉	青磁釉	吉文の一部に青磁釉付着。	9-14	146
10	瓦上器	瓦片	8.6	+8.0	+1.6	101	在地	不明	—	—	—	6-17	23
11	瓦上器	瓦片	3.9	4.7	+2.0	35	在地	不明	—	—	—	9-2	145
12	土器	小口付	—	8.2	1.4	15	在地	不明	—	—	—	7-2	72
13	土器	小口付	—	6.2	1.9	13	在地	不明	—	—	—	7-3	73
14	金屬製品	鉢	3.4	7.5	2.0	51	在地	不明	—	—	—	9-11	67
15	金屬製品	鉢	11.2	—	+0.6	15	在地	不明	—	—	—	9-5	57
16	石製品	砥石	+7.0	+2.9	+0.6	20	在地	不明	—	—	石上砥	9-5	66
17	石製品	砥石	+4.5	+4.4	+0.7	14	在地	不明	—	—	石上砥	9-6	67

II 層構築外出土遺物(第28図)

*は現存種

No.	種別	器種	法量			産地	時期	軸調		備考	国版番号	登録番号	
			口径	底径	器高			内	外				
1	施釉陶	瓶	—	5.8	2.2	71	佐世	18C前	長石釉	長石釉	珠輪による粘付け、吉文。	7-14	120
2	土器	小口付	—	6.0	+1.5	55	在地	—	—	—	内底面撲付。	8-22	89
3	瓦	平瓦	-8.1	-7.7	-1.6	120	在地	不明	—	—	—	6-9	3
4	瓦	瓦片	-8.6	-9.3	-2.7	182	在地	不明	—	—	内底布目敷み。	6-5	47
5	金属製品	鉢	-9.3	-9.4	—	9	在地	不明	—	—	—	9-9	58
6	無地陶	壺	—	—	+0.8	35	霞浦	中世	—	—	—	9-18	149
7	無地陶	壺	—	—	+1.5	32	在地	大清後期	—	—	—	9-17	148

III 層構築出土遺物(第29図)

*は現存種

No.	種別	器種	法量			産地	時期	軸調		備考	国版番号	登録番号	
			口径	底径	器高			内	外				
1	施釉陶	瓶	11.8	4.4	4.9	108	大瀬町	18世紀代	灰釉	灰釉	珠輪施左文、側の出し窓台。	7-9	122
2	施釉陶	瓶	8.5	—	2.6	6	大瀬町	18世紀代	灰釉	灰釉	吉文	8-5	99
3	施釉陶	瓶	—	3.4	+1.3	5	在地	吉文	—	—	—	117	
4	施釉陶	小瓶	—	3.2	0.85	4	在地	不明	珠輪	珠輪	内外面下部珠輪で周縁施し。	8-12	116
5	施釉陶	鉢?	17.9	—	3.2	2	在地	不明	—	—	—	101	
6	施釉陶	鉢?	—	—	—	—	在地	珠輪	珠輪	珠輪	珠輪被施。	8-9	107
7	土器	小口付	10.2	6.5	2.6	26	在地	—	—	—	印軸承切。	8-20	86
8	土器	小口付	—	7.2	1.6	19	在地	不明	—	—	印軸承付、側少暈付着。印軸承明。	8-27	76
9	土器	小口付	—	7.8	0.85	20	在地	不明	—	—	印軸承切。	8-24	88
10	土器	小口付	10.6	—	2.1	6	在地	不明	—	—	口縁部内側に暈少暈付着。	8-39	95
11	土器	小口付	—	6.8	1.7	22	在地	不明	—	—	印軸承切。	8-24	71
12	瓦	平瓦	+5.0	+4.6	+1.9	50	在地	不明	—	—	—	21	
13	瓦	平瓦	+4.8	+4.9	+1.5	40	在地	不明	—	—	—	20	
14	瓦質土器	風呂	20.4	—	4.45	136	在地	不明	—	—	匂ひの可能性。	9-1	138

写 真 図 版



1. I層上面遺構



2. P-1断面(北から)



3. P-5断面(南から)



4. P-6断面(南から)



5. P-2遺物出土状況(北から)

写真図版1

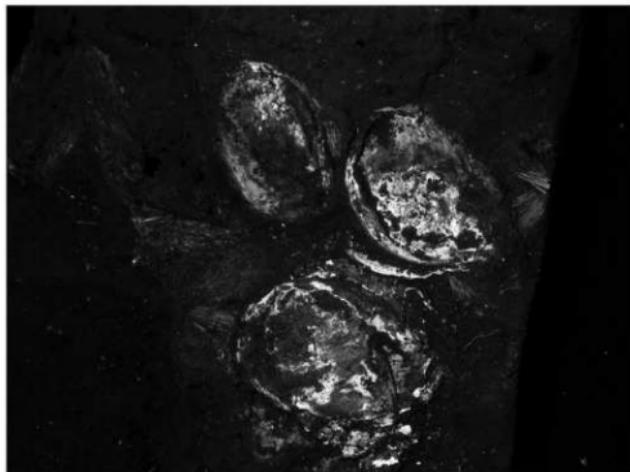


1. II層上面造構全景(西から)



2. II層上面造構全景(東から)

写真図版2



1. SX03不明遺構アワビ出土状況(南から)



2. SK08土坑遺物出土状況(南から)



3. SB03掘立柱建物跡遺物出土状況(南から)



4. II層上面遺物出土状況(東から)

写真図版3



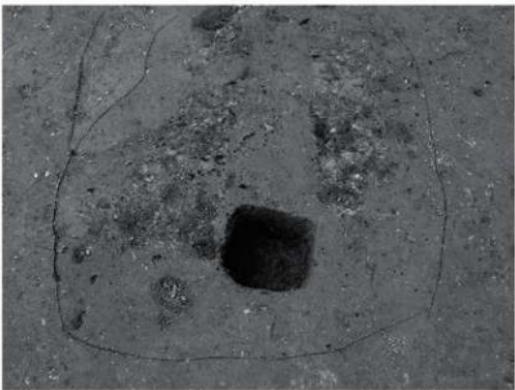
1. II層上面遺構北部完掘状況

(西から)



2. II層上面遺構南部完掘状況

(西から)



3. SX01不明遺構検出状況

(東から)

写真図版4



1. III層上面遺構全景(西から)

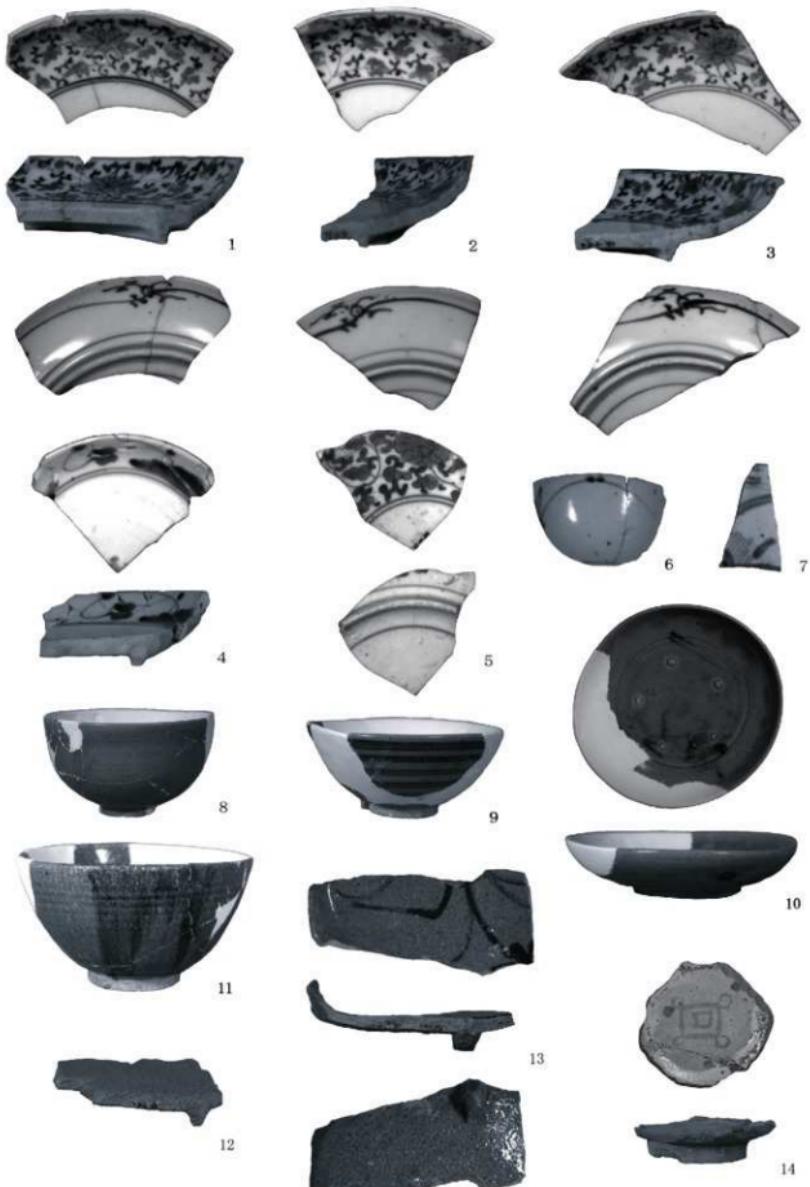


2. III層上面遺構全景(南から)

写真図版5



写真図版 6



写真図版 7



写真図版 8



写真図版 9

報告書抄録

ふりがな	たけこまじんじやけいだいいせき						
書名	竹駒神社境内遺跡						
副書名	市指定文化財向唐門解体修復及び耐震補強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第8集						
編集者名	川又隆央						
編集機関	岩沼市教育委員会						
所在地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-22-1111						
発行年月日	西暦 2009年3月31日						
所収遺跡	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号	° °'	° °'			
竹駒神社 境内遺跡	宮城県 岩沼 市福井町	042111 15056	38° 6' 16"	140° 51' 40"	20071104 ～ 20071212	169 m ²	市指定文化財解体 修復及び耐震補強 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
竹駒神社 境内遺跡	社寺跡 ・ 中世・近世	中世	溝跡	中世陶器 磁器	文獻等の記録では 見られない中世段 階の区画溝を確 認。		
		近世	礎石建物跡 掘立柱建物跡 柱列跡 通路状遺構 土坑	近世陶磁器 土器 瓦 土製品 古錢	向唐門の地下構造 のはか、江戸時代 の境内空間利用を 確認。		

